

# ドリーム

2016  
02  
Volume 86

今号の特集  
Special Fetishism Series

18  
未  
満

幻装  
神姫  
フェアリーフレア  
天草白×宮代龍太郎

新連載  
new serial

# 催眠

常識が淫欲に書き換えられる—

【連載&読み切り小説】  
高岡智空 × 草上明  
桜空 × 山田ゴゴゴ  
ほいほい × Aとし  
三津谷鷹介 × ぶん  
火村龍 × 竹馬2号  
空鏢 × ほっしい  
蒼井村正 × 或十せねが  
上田ながの × 宮越良月

cover illustration by ほっしい



うるし原  
智志  
ほっしい  
コザ

表紙&ピンナップ  
イラスト  
応募者全員サービス

【えっちマンガ&4コママンガ】  
ぼふえ  
天海雪乃  
とけーうさぎ  
ゆたかめ  
BadHand  
嘉納あいら

立ち読み版





常識に催眠変換された魔法少女

催眠で常識を書き換えられた魔法少女は悦楽の宴に身を墮とす……





世を脅かす人ならざる者と、魔の力を用いて戦う少女。——魔法少女イリス。そう人々から呼ばれて久しい、金髪にライトグリーンの瞳を持つ少女が重い臉を開けると、日々通い慣れた学園の教室の風景が映り込む。室内は照明がついているお蔭で明るく見渡せたが、窓に目を向けると、外に闇が広がっているのが見て取れる。

(あれ……なんで、私……)

魔法少女としての装束——ぴっちりとしたボディラインを際立たせるスーツに身を包んでいるのに、正体を隠して一留学生として通っている学園内に居ることの違和感が、寝起きの胸を衝く。深夜と思しき時刻に学園に居る理由も、見当たらぬ。

——が、それらの疑念はすぐに霧散した。

「うわ！ 本当に居る！ 居たよイリスちゃん！」

「マジもんの魔法少女イリスなんだあぁ」

やたら興奮した様子で教室にやって来た十名程の男子学生。いずれも同級生。同じ教室で学ぶクラスメイトも数名含まれていた。一度見た顔は忘れないイリスにとって、どれも見覚えはあるものの会話をした記憶はない。

(……あ。そう、だ……私)

一樣に根暗さを窺わせる多数の来訪者の顔をまじまじと正視した瞬間に、自身が教室で魔法装束を纏い待っていた理由を思い出す。そう、「彼らを待っていた」のだ。

「あ、あのお……イリスちゃん？ 本当に今夜は」

クラスメイトの小太りの男子生徒。いつも俯いて隅で押し黙っている印象しかない彼が、恐る恐るといった様子ながら、先陣を切って話しかけてくる。

どうやら、彼のほうも事情を察しているようだ。

ならば話が早い。説明の時間が省けたことを喜んで、イリスは彼に屈託のない最上級の笑みを捧げた。

「ふおおおお。イツ、イリスちゃんに微笑みかけ

られっ……夢みたいいい」

(……変な子。ただ笑いかけただけなのに)

けれど、「夢」というキーワードが妙に引っかかる。夢を見ている時のような、細部のつじつまの合わないさにもやもやした想いを抱いていたせいだ。

けれど、今は緊急にこなさなければならぬ「任務」がある。そのために彼らもここに来てはるはずだ。焦りにせつつかれて、イリスはもやもやとした感情を再度胸の奥底、その片隅へと押し込めた。

「みんな。まずはお礼、言わせて。……来てくれてありがとう」

まだ、緊張しているのか。遠巻きに囲むだけで近寄ってこない他の男子達の顔を順に見つめ、そして唯一近場にいる小太りのクラスメイトへと、イリスの均整の取れたボディを正面から密着させた。

「ふひっ!! お、おぼっ!!」

魔法少女のコスチュームは、魔法障壁が備わっているがゆえに動きやすさ重視の薄いレオタード形状だ。その薄布がイリスの豊かに実った双乳の丸みと弾力を遺憾なく、触れ合う小太り男子に伝える。

おそろく初めてであろう同世代女子との接触と、思春期のまだまだ発育途上なEカップバストの感触に酩酊している彼の、半開きでよだれ垂らしているだらしない唇にイリスの視線が注がれ。

「まずは、来てくれたお礼……させてもらうね」

囁きかけた唇から漏れた吐息のくすぐったさに小太り男子が面映ゆい表情を浮かべた直後。

「んっ……ちゅ……っ♡」

——口づけは、男の子への心からのお礼。「常識」に沿って、イリスはファーストキスを今日初めて会話をした彼に捧げた。

「ふはっ! あ、ああ。イリスちゃんっ。ぼ、ぼく……今のが、は、初めて……っ」

——初めてお礼をされて、照れているのね。そう

解釈して。

「キミも、なんだ。……私も。今のがファーストキスだよ」

また、感謝の気持ちたつぷりの笑顔を差し向けるすると、小太りの彼は元からたるんでいる頬をより緩めて、感涙してしまった。

——そんな、お礼されるのが嬉しかったんだ。感謝して、感謝される。悪い気はしない。

恥ずかしがったり、惜しんだりしては、礼を尽くすことにならない。それもまた「常識」。だから、初めてのキスをほとんど知らぬ相手に与えたことについて、感謝された喜び以外の感情が芽生えぬことに、いささかの疑問も抱かなかった。

純然たる喜びに綻んだイリスの、濡れた唇が照明を反射し、煌めいて映る。小太りの彼の口づけの残滓を凝視して、遠巻きに見ているだけだった他の男子達の目の色も変わった。

「まままま、マジだっ。ここまでの流れ全部、あの書き込みの通りだよ」

「いつもテレビのニュースで見てる、魔法少女イリスちゃんと俺もキスっ、できる……!!」

その正体が同級の留学生だとは知らぬ彼らの目に、高嶺の花の初キスを奪った同胞への羨望と嫉妬。そして、強烈な情欲の色が差し込んでいく。

憧れの正義の味方が、誰にでもキスするような女だった。その衝撃にどよめいたのも束の間。皆、期待に満ちた目でイリスを見、一歩、また一歩と距離を詰めてくる。

彼らにも、平等にお礼をしなければならぬ。

「キミも。ありがとうっ」

「んむふっ!!」

名残惜しむように潤む瞳で見つめてきている小太りの彼から身を離して、まず一人。

「キミも。ありがとうね……ちゅっ」

「キミも。ありがとうね……ちゅっ」

「キミも。ありがとうね……ちゅっ」



「ふむうう！」

二人。

「あは……ちゅっ。ちゅ……んふ……ちゅうっ」

三、四、五、六……十。

最初に済ませた小太りの彼を含めて十一人目。最後となった男子は、待たされた分興奮を募らせていたのか、触れ合うだけの口づけに満足せず、唇を押しつけ、舌でイリスの口唇を舐り回してきた。

「ふあ……っ。あ……ん……っ。やだ、よだれまみれの唇、じつと見られちゃ恥ずかしいよう」

「キ、キスは恥ずかしくないのに、そこは、恥ずかしいんだ？」

十一人目の彼がそんな風と言うが、当たり前だ。

キスは魔法少女の使命に協力してもらえなことへの礼で、感謝しこそすれ、恥ずべき理由がない。

対して、よだれまみれになった口唇を見られることについては年頃ゆえの羞恥が自然と湧いた。

——どうして、そんなわかりきったことを、彼は尋ねてきたんだろう？

逆に疑問が生じたが、身に奔る羞恥と、何より急を要する使命に駆られて、イリスは濡れ光る唇を再度開き——ついに、本題を告げた。

「今、私が対峙している魔の者は強力で、このままじゃ勝てないかもしれない。勝つためには、今よりもっと大量のエネルギーが必要なんだ」

真面目に話す姿を見て、逆に訝しがられている気がするのだけれど、気のせい——だろうか？

「だから……お願い。魔法少女のエネルギー……あなた達の精液を、私のお股から、中につばい注いで。みんなの協力が必要なの……！」

彼らもそのために集まってくれたのだと思うから。不純な動機ではない、使命を果たすための行為だから。躊躇なく、むしろ昂揚に包まれた表情と口振り、複数男子に「私と今から性行為して欲しい」旨

を告げた。

「イリスちゃんファンクラブのツイート通りだ」

「あの鍵付きアカウントを見た俺らだけが、イリスさんとヤれるんだよ、今から！」

——私とそのツイートを書き込んだのだから、一言一句違わなくて当然。いつ、ファンクラブがあるのを知ったのかは思い出せなかったが、「自分が書き込んだ」という事実のみが記憶に強くあり、イリスに疑う余地は微塵もなかった。

魔力の源は精液。これもまた魔法少女であるイリスにとつて「常識」。いつ知ったかはやはり思い出せなかったが、常識を逐一疑う者などいない。

新鮮で強い種子であるほど魔力還元率が高く、また大量に必要とするだけに、供給者は若いほうが望ましい。もう一つの「常識」を脳裏に浮かべ、眼前の面々を品定めする。

(みんな、たくさん濃ゆい精子を注いでくれそう。ありがたいわ)

前屈みになって忙しくそわつく男子達。その眼は情欲にギラつき、鼻息荒げるだけでは収まらずに半開きとなった口腔からも熱い息を絶えず吐き出している。性的興奮ぶりをこれでもかと体現している彼らは申し分ない協力者に他ならなかった。

「精子の提供をしてもいいって人だけ、もっと前に来て。よおく、見て……ね」

任務は急を要している。興味本位や性的興奮からではない、焦燥が少女の内を満たしていた。

一方で、男は性的に興奮させペニスを勃起させなければ、性交に至れない。処女の身なれど有していた知識に従って、イリスは早速行動に打って出る。

「こうするとよく見える、かな……？ 私のヒップ……結構、自信あるんだ……」  
腰を折り、前傾姿勢で肉突きの良い尻を押し出して見せつける。にじり寄ってきた賛同者全員に見え

るよう、尻を振りながら右回りに動く。その際、前傾となることで一層豊かさや重量感が際立った両乳房も、尻を見そびれた角度に立っている男子の目を釘付けにした。

「私……まだセックスはしたことないんだけど、魔の者と戦って身体は鍛えてあるから。だから、きつと、縮まりとかいいと思うの。キミ達を、その……気持ちよくさせられると思うんだ。だから、ねっ……早く……みんなのおちんちんを入れて、欲しいの……」

ミニスカートからこぼれた肉付き良く実った丸尻を自ずから曝して、左右に、上下に振り立てる。拙い性知識で思いつく限りの言葉を尽くして、男子達の興奮を煽ろうと試みる。

「セックス初めてって、しょ、処女……つてこと?!」

「マジかっ」

「お、俺らの中の誰かがイリスちゃんの初めてに」

「つか、処女なのに、乱交しちゃうんだ……」  
鼻の下をだらしなく伸ばしている者。縮まりのない口から垂れた己のよだれを慌てて吸る者。妙に前屈みで赤い顔をした者もいれば、どもりまくった末に咳き込みだした者まで。いずれも不可解な、同世代の男子達の反応に終止符を打ったのは、イリスの胸の内の違和感をも納得させた、例の一文。

「ま、魔法少女の使命のためなんだよ。だから……ボクらも、きよ、協力してあげなきゃ。だろっ?!」  
ファーストキスを捧げた小太りの彼が発したその言葉で、男子達の心は一つとなった。

——目の前の女。憧れの正義の味方。密かに日々自慰の贅に生きてきたびつちり衣装の同世代美少女に子種を注ぐ。口づけられて膨れた思慕と性的欲求のありつたけをぶちまける、捌け口とする。

そんな劣情の程を、接触前からありありとイリス



あまくさしろ  
小説 **天草白**  
NOVEL  
みやしろりゅうたろう  
挿絵 **宮代龍太郎**  
ILLUSTRATION

美しきヒロインに催眠の魔の手が迫る!!



幻装神姫  
*Fairy Illusion the miracle princess*  
**アクトア**

催眠に穢された聖性

第1話 催眠の罠! 変身ヒロインのフェラチオ奉仕

赤い人影が無機質な作りの回廊を駆け抜けていく。遠くから、侵入者を示す警報サイレンやいくつもの怒号や喧嘩が聞こえた。

「侵入者はどこだ！」

「忌々しいフェアリーフレアめ！」

「必ず見つけて八つ裂きにしろ！」

変身スーツの力で常人の十倍以上に強化された聴力は、敵のやり取りの一つ一つを鮮明に捉えていた。どうやら《黒い樂園》の戦闘員たちは見当外れの場所を搜索しているようだ。

「陽動作戦は成功したみたいね」

つぶやいた人影——その少女は美しかった。

年の頃は十代後半だろうか。凛々しい美貌を彩るツースイドアップの赤い髪。勝ち気な光を宿す切れ長の青い瞳。

敵地の真つただ中にありながら、芸術的なまでに整った顔立ちには畏怖の欠片もない。浮かんでいるのは強い闘志と不敵さだけだ。

可憐な印象を与える戦闘スーツに包まれた長身も、容貌と同じく凛々しくも美しいプロポーションを誇っていた。

胸元にあしらわれた金の縁取りがなされた緑の宝玉が、薄暗い基地内で幻想的なきらめきを放つ。

白と赤に彩られたレオタード状のスーツは身体に密着するように張りつき、豊かに盛り上がったDカップの双丘や見事に括れた腰つき、引き締まったヒップラインまでを忠実に浮かび上がらせていた。

真紅のアームスリーブと膝上まであるブーツに覆われた四肢はスラリと伸び、スカートがはためくたびに艶めかしい太ももが露わになる。

「罪もない人たちを捕まえて人体実験に使おうとするなんて……ブラックエデンのやり口は絶対に許さない」

抑えきれない思いが言葉になって溢れ出る。

ここは世界中に七つ存在するというブラックエデンの前線基地の一つ《ベルフェゴール・ラボ》。彼女の使命はその中枢に捕らわれた人々の救出と、基地の壊滅だった。

「見つけたぞ、フェアリーフレア！」

「侵入者発見！ ただちに射殺しろ！」

前方から黒ずくめの一団が駆けつける。さすがに目的の場所まで簡単にたどり着かせてくれるほど、敵も甘くないようだった。

現れた戦闘員たちは、全部で十五人。いずれも筋骨隆々とした体を黒いタイツスーツに包み、顔は白い縁取りのある目出し覆面で覆っている。ざらつく無数の眼光が、侵入者であり仇敵でもある彼女——フェアリーフレアを一斉に見据えた。

「いくら貴様が強くても、この狭い通路では逃げ場はない。ハチの巣になるがいい！」

戦闘員たちがマシンガンを構える。銃弾を避けるほどのスピードを誇る無敵の変身ヒロインとはいえ、数メートルの幅しかない通路上では動けるスペースが限られていた。逃げ場はない。

「終わりだ——」

「あなたたちが、ね」

引き金が引かれようとした刹那、フェアリーフレアは床を蹴り、音速に近いスピードで突進する。

白と赤、二色の閃光と化したフレアは一瞬にして彼らに肉薄した。引き金が引かれるよりも早く、スラリと長い脚がはね上がる。マシンガンをまとめて弾き飛ばした。

「き、貴様……」

慌てる戦闘員たちに、フレアの拳が、蹴りが、次々と叩きこまれた。

「がはっ」「ぐ、ううっ」「ぎゃあっ」

鋼鉄すらも砕くパワーを誇るフレアの打撃には、肉体強化手術を施されている戦闘員もなす術がな

った。

瞬きする間もなく、悪の尖兵は全員床に転がった。うう、と苦しげに呻いているところを見ると、かろうじて息はしているようだ。だが、当分は立ち上がれないだろう。

フレアは戦闘員たちを一瞥すると、先を急いだ。長い通路を進み、ようやく奥までたどり着く。

そこには鉄格子の牢に捕らわれた数十人の人々の姿があった。幼い子供から若い男女、中年や老人に至るまで、性別も年代もバラバラの集団だ。

いずれも人体実験のためにブラックエデンに捕らわれた人々だった。

「皆、もう大丈夫よ。牢を壊すから離れていて」

フレアは鉄格子に両手をかけると、苦もなく左右に押し広げた。数人が通れるほどのスペースができるまで頑強な鉄格子を捻じ曲げる。

「さあ、早く逃げて。組織の追手が来る前に」

「あなた……まさか、噂のフェアリーフレアか!？」

「ありがとう、フェアリーフレア！」

人々たちの感謝の声が、戦いで張り詰めて疲れた心と身体を癒してくれた。

「おっと、そいつらは大事な人体実験用のモルモットだ。勝手に逃がされては困る」

反対側の通路から現れたのは、一人の老科学者だ。いかにも狡猾そうな顔立ちに白髪、白い髭。小柄な全身から漂うオーラは、対峙しているだけで禍々しくも不気味な印象を受ける。

「ドクターゴルバ……!？」

ブラックエデンを束ねる首魁にして、世界最高峰の頭脳を誇る邪悪な科学者だ。さらにその背後から十数人の戦闘員と異形の化け物が歩いてきた。

ブラックエデンの主力兵器である《怪人》である。人間を素体とし、精神エネルギーの具現化装置である《FEDドライブ》によって、禍々しい姿と超常の

力を得た怪物」。

二本の角を備えた狰狞な竜の顔。蝙蝠コウモリのような皮膜状の翼。鋭い爪を備えた四肢。光沢のある深緑色の鱗に覆われた体躯は優に五メートルを超える。

「お前がフェアリーフレアか。組織の同胞である怪人たちを三十三人も殺した憎い女め」

「罪もない人々を苦しめ、殺してきたのは、あなたたちのほうでしょう」

フレアが凜として言い放つ。

「同胞の仇を取らせてもらうぞ。行け、ワイバーンエデン」

「お任せを、ドクター」

怪人が進み出た。背から生えた一對の翼が、フレアを威嚇するように大きく広がる。

「無理ね。あなたはここで倒される。今から、私に」

言うなり、フレアは床を蹴った。

胸元の宝玉が輝きを放ち、同時に彼女の身体能力が爆発的に増大する。一瞬にして亜音速にまで達したフェアリーフレアは怪人の背後へと回りこんだ。

「は、速い!!」

「あなたが遅すぎるだけよ」

突き出した掌底が数トンの衝撃を伴ってワイバーンエデンの背中に叩きつけられる。

「がっ!!」

苦鳴とともに五メートル超の体躯が吹き飛ばされた。鉄製の壁に激突し、クレーター状に陥没させる。

「パワーでも、スピードでも……この俺がこんな小娘に負けている、だと……!!」

「当然よ。コビーがオリジナルに勝てると思ったの?」

フレアが冷然と言い放った。

「あなたたちのFEDドライブは劣悪な模造品に過ぎない。私を持つ真のFEDドライブの敵じゃないわ」

「ぬかせ、小娘がっ!!」

怒りの声を上げて竜の怪人が向かってきた。先ほどのダメージをまったく感じさせない動きだ。

「凶体が大きいただけあって頑丈ね」

繰り出された長大な尾を、フレアは身を屈めて避ける。狙いを外れた一撃が背後の壁を砕いた。鋼鉄をも砕くパワーは、徒手空拳で相手をするには骨が折れそうだった。

ならば、とフレアは右手を高々と掲げる。

「FEDドライブ・アクセラレーション! 来なさい、我が剣——ブレイジングソード!」

凜とした叫びとともに高まる精神力が、FEDドライブによって加速する。

真紅の輝きが弾けた。

きらめく光の粒子が美しく舞いながら収束し、一つの形を作り出す。一瞬の後、フレアの手には幾何学的なデザインの長大な剣が握られていた。

まっすぐに伸びた白銀の刃。美しい菱形をした黄金の鏢。フレアの闘志が具現化した聖剣——ブレイジングソードだ。

一閃。ワイバーンエデンの両腕が切断され、地面に落ちる。噴水のように噴き出した血がフレアの全身を赤く染めた。

「お、おのれえつ……!!」

怪人は怒りの雄たけびを上げて全身を震わせた。両腕の切断面が盛り上がり、まるでビデオの逆回しを見るように、瞬時にして両腕が再生する。

「残念だが、俺様は不死身だ」

「無限再生能力を備えたタイプか。厄介ね」

フレアが怜悯な美貌をわずかにしかめた。

「ただで、どんな怪人もコアを砕かれれば、再生は不可能よ」

「その前に貴様を燃やし尽くす! 食らえ!」

ワイバーンエデンが耳元まで裂けた口から炎の塊

を放つ。大気がプラズマ化して焼け焦げる。超高温の炎がまっすぐに迫った。

「無駄よ。聖剣ブレイジングソードに切れないものはない——」

振り下ろした聖剣は不可視のエネルギーをまとい、炎の塊を真つ二つに切り裂く。その勢いのまま、フレアは怪人へと迫った。

「馬鹿な、炎すら切る剣だど!!」

怪人は驚きの声を上げて、さらに炎を放つ。

フレアが振るう聖剣はそのことごとくを弾き、切り散らした。怪人はたまたま距離を取ろうと後退する。だがフレアが踏み込み、最後の二撃を放つほうが一瞬早かった。

「これで終わりよ!!」

裂帛の気合いとともに、胸元の宝玉がまぶしい輝きを放つ。同時に手にした剣が赤い燐光をまとった。

「ギガフレイムザンバー!」

上段から振り下ろしたブレイジングソードの輝く刃が、ワイバーンエデンの巨体を真つ二つに切り裂く。鮮血が噴水のようにしぶき、床を朱に染める。

体内のコア——FEDドライブごと切断された怪人の骸が重々しく倒れた。

「後はあなただけよ、ドクターゴルバ」

身体の前でXの字に聖剣を振って血糊を飛ばすと、フレアは敵の首魁に向かって剣を構え直した。

「……ふん、いい気になりおって」

老科学者は額に汗をにじませて後ずさる。その周囲には十数人の戦闘員がいるが、いずれもフレアの敵ではない。

ブラックエデンは実質的にドクターゴルバが仕切るワンマンな組織である。彼を捕獲すれば組織は瓦解する。

「甘いわ。この私がそう易々と捕まると思うか!」

ゴルバが懐に隠し持った銃をいきなり取り出し



撃った。銃口から稲妻に似た光芒が放たれる。  
だが、反射神経や運動能力が常人の数十倍にも増強されているフレアにとって、銃撃を避けるなど造作もないことだ。

身を仰け反らせるようにして光線を避ける。

（えっ……!?!）

そこで敵の狙いに初めて気づいた。

ゴルバが狙ったのはフレアではない。彼女の背後にいる、逃げ遅れた人々――。

「卑怯なっ」

叫びながら、フレアは身体を反転させた。一瞬にして亜音速まで加速。身体を投げ出すようにして、人々の前に立ちほだかり、光線を浴びる。

「かうっ……は、早く逃げてっ」

稲妻のような衝撃に貫かれながら、フレアが叫ぶ。人々が逃げ出すのを見届けたところで、両足の力が抜けてその場にしゃがみ込んだ。

「くくく、しばらくは動けまい。今のうちに逃げさせてもらおうぞ」

銃口をこちらに向けたまま、悪の科学者が笑う。

フレアは立ち上がれなかった。身体中が痺れて力が入らない。

『催眠レベル1——視覚誤認』

ふいにそんな声が響いた。

（な、何……!?!）

意識が薄れて混濁していく感覚があった。視界がぼやけ、眼前のドクター・ゴルバの姿がぐにやりと歪んで見える。

「この通路の奥にある司令室に入ると、お前は暗示にかかると」

『レーテの基地に戻ったのだと錯覚する』

『私を味方の科学者だと誤認する』  
『私の指示通りに戦闘後の精神洗浄を受ける』  
『キーワードは《白銀色のニンジン》だ』

声とともに、目の前がすうっと暗くなる。

一瞬、意識が暗転していたのか――気がつくとき、眼前からドクター・ゴルバと戦闘員たちの姿が消えていた。通路の向こうへ遠ざかる足音が聞こえる。

「逃がさないわよ！」

フレアは床を蹴って駆けだした。

変身を解いたフェアリーフレア――火澄<sup>ひよどろ</sup>桃香は長い通路を走っていた。

変身していると大量の精神エネルギーを消耗するため、いったん解除したのだ。ブレザータイプの制服姿で走り続けた桃香は、やがて通路の奥にある巨大なドーム状の部屋にたどり着いた。

壁一面の電子機器やモニターから察するに、ここは司令室らしい。部屋の中央にある玉座を思わせる椅子にドクター・ゴルバが悠然と座っていた。

その左右には十数人の戦闘員が控えている。

「くくく、よくぞここまで来た、フェアリーフレア」

「もう逃げられないわよ、ドクター・ゴルバ！」

威勢よく叫びながらも、フレアは慎重に距離を詰めた。敵はブラックエデンの首魁である。どんな奥の手を隠し持っているか分からない。畏を仕掛けて

いるかもしれないし、緊急避難用の隠し通路が備えてあるかもしれない。

（これが最後の戦い――私に力を貸して、研究所の

皆、悠斗くん）

仲間たちに、そしてほのかな想いを寄せる幼なじみの少年に心の中で祈り、桃香は右手に持ったペンダントを高く掲げた。

「FEドライブ・イグニッション！ 顕現せよ、妖

精の衣――ブレイジングドレス・マテリアライズ！」

凛とした叫びとともに、金のフレームに緑の宝玉がはめ込まれた美しいペンダントがまばゆい輝きを放つ。同時に、ブレザーが無数の光の粒子となって弾け散った。

十代の乙女ならではの白く清らかな裸身が露わになった。滑々とした肌はまばゆい輝きの中で艶めいた光沢を放ち、豊かに盛り上がった魅惑の双丘が弾力感たっぷりに揺れ、上下に弾む。

日頃の鍛錬の証である引き締まった腹部と芸術的なまでに括れた腰つき、そして白桃を思わせるキュツとした美尻に続くS字ラインは少女から大人の女への過渡期独特の健康美と色香を併せ持っていた。すらりとした両足の付け根に息づくのは、黒く陰る秘所だ。

凡百の男には決して目にすることが叶わない清廉な裸身が一瞬晒された後、光の粒子に再び包まれた。白と赤のレオタード状のスーツが首から胸、股間にかけてを覆う。腰回りを可憐なスカートが飾り、伸びやかな腕には赤いアームスリーブが、スラリと長い美脚には同じく赤いブーツが装着される。

最後に豊かな胸の谷間の上部に、金色に縁取られた緑の宝玉が装着されると、凛々しくも美しいフェアリーフレアの戦闘フォームが顕現した。

「心の力で炎を灯し、闇を滅する聖なる妖精！ 幻

装神姫フェアリーフレア！」

正義のヒロインが凛然と名乗りを上げる。

「白銀色のニンジン」

ドクター・ゴルバが口元を笑みの形に吊り上げ、意味不明の言葉を告げた。

「えっ……!?!」

次の瞬間、視界が揺らいだ。眼前のゴルバが、周

「洋館の母娘 蜜肌のW報酬」「誘惑温泉旅館 冬休みのアバンチュール」「魅惑の楽園マンション 若妻と熟れ妻たち」「恥辱の風習 捧げられた新妻」「ご褒美は柔肌で 憧れの幼なじみは生徒会長」

囲を守る戦闘員たちが、壁が、床が、天井が——ぐにやりと歪んでいく。フレアは頭を左右に振って、薄れる意識を現実には繋ぎ止めた。

「な、何……!?!」

気がつけば、周囲の景色は一変していた。

殺風景なスチール製の壁に囲まれた部屋だ。壁一面に並ぶ電子機器がせわしなく明滅する。白衣の研究者たちが狭い通路を忙しそうに行き来する。

「ここって、レーテの研究所……?」

つい先ほどまでブラックエデンの本拠地にいたはずなのに。なぜ、彼女が所属する組織——精神エネルギー国際研究機関《レーテ》の施設内にいるのか。

「私、いつの間に戻って来たの?」

わけが分からず、フレアは呆然とつぶやいた。

「お帰り、フェアリーフレア」

白衣を着た老人が歩み寄った。

（えっと、この人は誰だったかしら?）

誰かに——そう、自分にとって憎むべき誰かに似ているような気がするのだが、頭に霧がかかったように思い出せなかった。

「あなた……は……?」

「何を言っている? 私は権堂だ。F E D ライブの調整をいつもしているだろう」

そうだ、この人はF E D ライブの開発主任を務める権堂博士。なぜ忘れていたのだろう。

「すみません、私……なぜか博士のことを一瞬思い出せなくて」

「激しい戦いで疲労がたまっているんだろう」

権堂の視線がフレアの身体を這い回る。もちろんいやらしい意味合いではない——はずなのだが、なぜか背筋がぞくりと粟立った。

※

（どうやら催眠は成功したようだな）

ドクターゴルバはニヤリとほくそ笑んだ。

フェアリーフレアは自分のことをレーテの科学者である権堂博士だと、そしてここをブラックエデンの基地ではなくレーテの研究施設だと誤認している。強力な精神防壁を持つフェアリーフレアも、これまでの戦いで消耗した状態では、新たに開発した新型の催眠光線を防ぎきれなかったのだろう。

「催眠レベル1は成功というところか、くくく」

老科学者は変身ヒロインの肢体にいやらしい視線を這わせた。

変身スーツを内側からパツンパツンに盛り上げている魅惑的な胸の双丘。臍のラインまで露わなほど密着したスーツの腹部。そして同じく尻の谷間がはっきり見て取れるほど布地が張りついた臀部。そのすべてが十代の乙女らしい瑞々しさと、匂い立つような色香に彩られている。

我知らず下腹部に血流が集まり、ズボンの下で男根が起き上がった。老人とはいえ、ゴルバは一晩に十数回の射精をこなすほど強烈な精力を誇る。

催眠にかかり、精神的に無防備な状態の変身ヒロインという極上の獲物を前に、ねっとりとした欲情が湧き上がっていた。

（レーテに忍ばせたスパイから情報は得ているぞ。お前が戦闘後に『ある作業』を受けることを。それを利用して、心も身体もたっぷり翫ってやる……!）

※

「作戦は成功した。ブラックエデンの基地は壊滅。残念ながらドクターゴルバは逃がしてしまったが、敵組織の戦力を大幅に削ぐことができた。よくやってくれたね、フェアリーフレア」

「捕らわれていた人たちはどうなりました?」

作戦の顛末を語り、労つてくる権堂博士に、フェアリーフレアがたずねた。

「我々が保護したよ。負傷している者は治療したり、怪人に襲われた精神的ショックでPTSDを発症しないようメディカルスタッフのケアも万全だ」

「よかった……」

フレアはホッと安堵した。敵に勝利したこと以上に、多くの人を守れたことが何よりも嬉しい。

「あとは君のケアだけだ。いつものように精神洗浄作業をしようか、フレア」

フェアリーフレアは戦闘後に必ず「洗浄」という作業を受ける。精神エネルギーの具現化装置であるF E D ライブを使用した怪人との戦いでは、常に精神攻撃に曝されることになる。そのため、戦いの後には軽度の精神汚染が残ってしまう。

具体的には、怪人が発散する邪悪な精神に、フレアの精神が侵食されてしまうのだ。放っておけば、彼女の心に悪影響を及ぼし、最悪の場合には正義の変身ヒロインが邪悪な魔女になりかねない。

だから戦闘後には研究所のクリーニンングマシンでその汚染を洗い流す作業が必要となる。

「戦闘スーツのままでは腔内や直腸の洗浄ができない。股間部分だけスーツを解除してくれるかね?」

老科学者が事務的な口調で言った。

「君も知っての通り、洗浄は肌だけでなく口腔や膣、腸といった体内の粘膜にも行う必要がある」

戦闘後に必ず行っている行為とはいえ、フレアは年ごろの乙女である。相手が老人であろうと、異性の前で股間を晒すのは抵抗があった。戦闘のときの凛々しさが嘘のように、両足が震えてしまう。

「放っておけば、怪人の邪悪な精神エネルギーに君の心と身体が侵食されてしまうよ?」

「は、はい……ブレイジングドレス、部分解除」

フレアは顔をこわばらせながら、戦闘スーツの一

迷宮最奥に座す巨大な影――



我がもとへ  
辿り着くとは



幾多の敵を倒し



人の身でありながら  
一人でこの地下迷宮へ挑み



流石勇者よ  
先ずは普めてやろう



でかい…

だが…  
思えばがらん  
ほうがよいぞ



その小さな剣一つで  
我が肉体を  
滅ぼせるかな？

堂々登場！  
褐色ロリ魔王!!

ってハリボテなの!?

# 魔王様の知らない魔法

The magic that the魔王 does not know

ああこれかなかなか  
威厳と迫力のある椅子じゃろ？  
この迷宮に居た化け物を  
剥製にしてみたんじゃ

それで  
次は僕を剥製に  
するつもりか？

そう怯えるな  
こう見えてもわしはそなたに  
敬意を表しているのだぞ

どうじゃ？  
わしのモノとなって  
その力を振るう気はないか？



ほう  
ならば如何するか？



お：お前が本当に魔王なら  
そんな申し出受けられるか



これが  
答えだ！

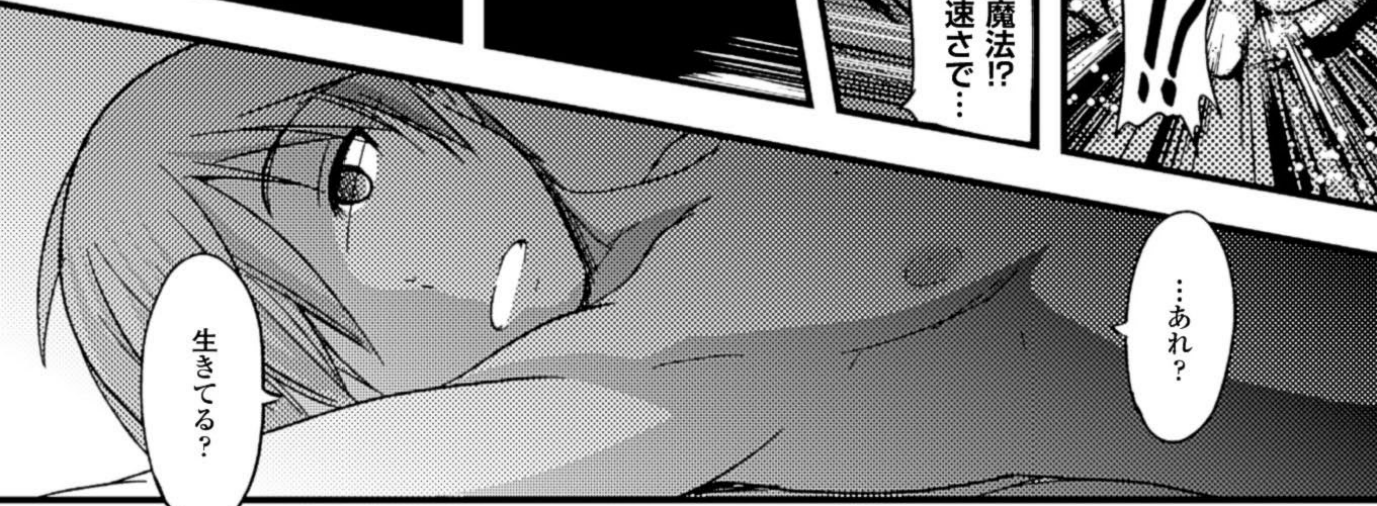
成程なるほど



いたた…



爆発魔法?  
この速さで…



生きてる…?

…あれ?



えーと…使うのは  
この薬でいいの?

そうそれ  
それは火傷にも効くし…

あっ!



あら気がつきましたか  
勇者殿

あ…お薬塗りますから  
大人しくしてくださいね

!!!

魔族?  
捕まったのか?

噂通りまだ若いし  
線も細いし  
ほんとかわいいわ

え?

え?

ゆるゆる

ゆるゆる

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

ご案内

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~5の番号がふられていますので、シーンの小説本文末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

希望の变身ヒロインは催眠をかけられ、  
憎き敵に自らエロ奉仕を捧げる!



ほむらりゅう  
小説/火村龍

NOVEL たけうま ころ  
挿絵/竹馬2号

ILLUSTRATION

純愛翔姫

エロティク

催眠に堕ちる希望



## シーン1.. 敗北の翔姫

夜、郊外の倉庫でのことだった。

忌まわしい機械が動き出し、紫色の波が身体を包んだ途端、メルティアナは全身に電流が走ったようにビクビクと痙攣し悲鳴をあげた。全身に満ちていたエナジーがコンパクトに封じ込められたばかりか、辺りに満ちていた人々の希望の心が霧散し、エナジーを集めることもできなくなってしまうのだ。

「な、なよその機械!? や、やめなさいっ……あああっ!!」

ふらついた隙に、左右から二条ずつ、合わせて四条のロープが蛇の如く伸びて四肢に食い込んだ。そしてロープの端を持った戦闘員どもに引つ張られ、両手両脚を大の字に伸ばした無様な立ち姿を披露させられてしまう。

少女は両腕に力を込めた。手袋が軋む、ロングブーツを履いた脚が交互に持ちあがる、縄から逃れようとするしかし、

「そんな、動けないっ?!」

ロープは紫色で、縄というよりゴムで作られたチューブのようだ。中には機械が放つものと同質の液体が詰まっている。いとも簡単に引きちぎれそうなのに、純愛翔姫の力でも、拘束から逃れられない。あの機械同様、これにも純愛翔姫の力の源——希望のエナジーを抑え込む細工がしてあるのだ。変

身は保たれているが、力は普段の十分の一も出せず、剣は消失し、魔法のように光の弾を撃ち出す技も、なにもかもを封じられてしまっていた。

「苦しいか」ジェイが言った。

年若く、メルティアナとそう変わらぬ年齢の男である。精悍な顔つきに見えるが、それは瞳が野心に燃えているためで、所作の端々に貴族のような優美さが垣間見えた。血のような赤の衣を纏い、同色の髪をきざつたらしく流している。衣の上からではそうとわからぬが、身体は引き締まっており、純愛翔姫の力に相反する、絶望のエネルギーを秘めていた。

「な、なんともないわ! こんなことくらいで、わたしは負けない!」

メルティアナは叫んだ。

「すぐに、このロープを解いて、あなたたちを倒してあげるから!!」

一年前、異世界からの侵略者ヴェラが現れたことも、時空にいた穴を塞ぐため、両親が自分を残して旅立ったことも、純愛翔姫メルティアナ——真咲ミサを動揺させることはできなかった。それどころか、状況が困難になればなるほど、ミサは自分でも驚くほどの力を発揮することができた。

彼女には人を惹きつける力があつた。学園があつた頃、彼女は生徒会長をしていたが、彼女の周囲には、男女問わず、秀才から不良にいたるまで、あらゆる人間が集まつた。

だから、異界の戦士に託された純愛翔姫の力は、まさしくミサにふさわしいものだった。それは最初、彼女の希望の心からのみエナジーを生み出すはずであつたが、次第に進化を遂げ、周囲の心からもエナジーを得るようになった。その進化は、ヴェラにとつて脅威となつた。ミサは人々に希望を抱かせるのが得意であり、無限に溢れ出る力にヴェラは為す術がなかつたのである。

純愛翔姫メルティアナは、力を得てからずっと敗北を知らなかつた。ミサは正体を知られぬよう闘い続けた。彼女は負けるわけにはいかなかつた。彼女なくして、この街がヴェラに対抗することはできないからだ。

今日も、メルティアナは勝利を信じていた。今日こそはジェイを倒し、街に一時でも平和を取り戻してみせると決意していた。

あの機械が動き出すまでは。

「その強気がどこまで続くか、楽しみにだ」

戦闘員のひとりが言った。彼らは揃つて黒ずくめの全身タイツのようなスーツを着て、無機質な銀色の仮面を被つていた。右腕には大砲の砲身を切り詰めたような武器をはめ、小型冷蔵庫のようなバックパックを背負っている。そこに溜めた絶望の力を撃ち出す装備だ。砲身はメルティアナに向けられていた。

「一年もの間、よくも我々の邪魔をしてくれたものだ。だが、それも今日で終わる。メルティアナ、いま我らに投降すれば、処遇を考えてやらんこともないぞ。そうだな……性奴隷にでもなつてもらおうか」

ジェイが言い、戦闘員どもが口笛を吹き、無防備なメルティアナの身体をねつとりと視姦した。

メルティアナのコスチュームは、人々に希望をもたらす存在であるためか、人目を引きやすい、派手なものであつた。桃色を基調とするアイドル衣装のようなボディスーツに、フリルのついたミニスカートが揺らいで、両手にはショートグローブを、脚には膝下までのロングブーツを履いていた。

メルティアナに変身するミサ自身もまた、それを纏うにふさわしい美少女だった。変身することで桃色になる髪は腰の辺りまであり、彼女はそれをツースライドアップにしていた。大人びた顔つきに反してその髪型には少女らしさが残っている。曇りのない眼差しと、ほんのりと朱が差す雪のような肌に桃色の髪はよく映えて、確かに魅力的ではあるが、同時に蠱惑的なものも見え隠れする。身体つきはスレンダーであるが、だからこそ余計に、胸と尻の膨らみは目についた。スカートとブーツに挟まれた太ももは大胆に露出しており、大事な部分を隠すスカートの奥を想像させずにはられない。ふるふるとなげに震え、内股気味になつた太

もも、擦りあわされる膝頭から、ブーツに包まれたふくらはぎのなだらかな膨らみが足首に流れていく様は、やはりそういう目で見ると、肉感的な、妖しい誘惑が潜んでいるのだった。

肢体をつぶさに観察され、舐めるように太ももや二の腕を視姦されると少女はいままで気にしたことなかつた羞恥の炎が、にわか燃え上がるのを感じた。戦闘員どもの視線は、下劣で醜悪な感情に満ちていた。牡の眼差しである。純愛翔姫の力が、周囲の感情を受け取るものだからだろう、それが手に取るようにわかった。メルティアナは唇を噛んだ。

「どうだ、投降するか？」

と、ジェイが再び訊いた。

「どんなことをしようとも、わたしは屈しない。正義は必ず勝つのだよ!!」

メルティアナが叫んだ瞬間、戦闘員の砲門のひとつが火を噴いた。放たれたのは黒々としたエネルギーの砲弾だった。メルティアナの脇腹にめり込み破裂した。

「きゃあああああつ！」

メルティアナは甲高い悲鳴をあげた。コスチュームからばちばちと火花が散った。いつもならばどんな攻撃を受けても痛みを感じないのだが、エナジーを抑え込まれたいま、防衛力そのものも下がっているのだ。視界がぐわんぐわんと揺れ、身体から力が奪われて、瞬く間に息が荒くなった。

「あぐつ、う、ああああ……」

「その顔が見たかったのだ、メルティアナ。苦痛に歪むその顔、悲鳴、もつと見せてくれ」

「だ、黙りなさい……! ううつ、その機械さえなければ……」

「貴様専用で作られたものだ、抵抗は無意味。純愛翔姫の力を解き、服従を誓えばやめてやろう」

ジェイはニヤニヤと勝ち誇った笑みを浮かべていた。メルティアナはその顔を睨みつけた。

「ま、負けないんだから!」

ヒロインは叫んだ。絶望のエネルギーが降り注いだ。

\*

途中から、戦闘員たちが勃起していることに気づいていた。部下の手前堪えていたが、ジェイも確かに昂奮を覚えていた。

「う、あ……」

メルティアナは微かに呻き、ぐつたりと脱力している。派手なコスチュームは汚れ、ところどころに穴が空いている。汗ばんだ女の匂いが、鼻腔をくすぐった。

ジェイの視線はメルティアナの太ももや、まろびでた乳房に釘付けになった。コスチュームの上から見ても魅力的であった乳房は、たわわに実った果物のように旨そうだった。白くならかなお腕型の盛り上がり、薔薇色の肉種が乗っている。泥に汚れた太ももや破損した衣装の、汗に濡れ妖しく光る様なども、純愛翔姫を屈服させた証

として、嗜虐的なカタルシスを感じずにはいられなかった。見ないでと叫ぶ女の声が、まだ耳の中に残っていた。

この女を徹底的に叩きつぶしてやろうとジェイは決めていた。プライドを踏みにじり、存在を穢し、築き上げた信頼も、生み出される希望もすべて破壊してやる。そして、絶望するメルティアナを処断するのだ。

ジェイはそのための技を会得していた。メルティアナに歩み寄り、顎をつかむと自分に向けさせた。少女の虚ろな瞳に光が戻り、「ジェイ……」と睨みつけてくる。まだあきらめていないことに、ジェイは満足した。メルティアナはそうでなければならぬ。

ジェイは、少女が気づかぬほどゆくりと、力を注いでいった。

「なにをするつもりなの……?」

そう言ったメルティアナの瞳が、徐々に光を失っていく。

「やだ……なにをしているの……」

メルティアナの声はいつもの活発さを失って、のろのろと蕩けていった。抵抗するように頭を振っていたが、それもやがて緩慢になり、ついには止まった。

「わたし、いや……こ、怖い……」

瞳から完全に光が失われ、メルティアナは物言わぬ脱け殻のようになって、床に座り込んだ。陰の消えた表情が可憐なだけに、汚れきった衣装がひどく淫猥であった。

ジェイが「お前の名はなんだ?」と尋ねると、パクパクと口を動かした挙句に、

「わたしは、純愛翔姫メルティアナよ」と答える。ジェイはさらに力を注いだ。

メルティアナを催眠にかける。ジェイはいつからかそう決めていた。元は敵から情報を引き出すため身につけた技だったが、こんな形で役立つとは考えたこともなかった。

催眠を解いたとき、メルティアナが浮かべる絶望の表情を思い浮かべると、ジェイの股間はいかに熱を持ち、硬くなっていた。

ジェイはどんな催眠をかけるかを考えた。メルティアナはもはや意識が朦朧とし、あらゆる言葉を受け入れる状態にある。純愛翔姫の力さえ抑え込めば、元は脆弱な地球人だ。

「お前は」ジェイはこみ上げる昂奮をそのままに口を開いた。

◆「この街の男どもを、骨抜きにするのだから?」◆  
◆「我らに奉仕するのが純愛翔姫の使命だ」◆  
シーン3 84ページへ









王妃陛下！  
一大事です！！

城内に  
魔物が！！

うおおお  
おッ？

封印の姫君

Elfascia the sealed Princess

# エルファシア

～魔に弄ばれた純心～

なんッ  
だ…!!

再び肉体を  
得たぞオ！

そして！

ついに魔王の封印が解かれてしまった！

王妃の持つ  
封印の力は  
この体に  
宿した！

もはやこの  
魔王を止める  
ことなどは

できぬ！！



肉体を得る…  
のを…待って  
いました…わ

霊体には…  
手出しでき  
…ない…

私にあった  
…力は…  
すでに…失わ  
れていま…す

今…度は…  
封印でなく  
滅ぼし…  
ま…す!

残念でし…  
たわ…ね…

調子に





フン  
味な真似を

あんなデブに  
憑いたのが

無駄になって  
しまったわ

ズ...

封印の力を  
娘に譲って  
いたとは  
して  
やられたぞ

ならば!

だが!

姫様!

今一度  
同じ事を  
するまでよ

無事  
ですか?

皆の者  
姫様を  
守る!

姫様!

ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ

ズン

ズン

ズン





姫様を  
守れか

クク…



魔王を  
倒す！

封印…  
しなくては

わたくしが  
やらないと  
そのため…  
に…は…



エルファシア  
姫様！

私をお使い  
ください！！

ありがとう  
エドワード卿

まあ  
こ立派♡

はじめて  
ですので  
上手くできる  
かしら？



学院の闇を探る特務教師を  
淫らな異常常識が  
嬲り尽くす!!

さくらそら  
小説 桜空

NOVEL

やまだ

挿絵 山田ゴゴゴ

ILLUSTRATION

いんどくさいみんながくえん

# 淫獄催眠学園

特務教師水谷瀬莉が牝奴隷に堕ちるまで



今日から全寮制の私立黒泉学院に赴任してきた女教師が、警備員に厳重な鋼鉄の門を開けてもらって中に入る。

（絶対に乗り越えられない壁がそそり立っていて、まるで監獄みたいね）

高さ五メートルはあろうかという壁を目にして思考を巡らせる。資料によれば人里離れた山奥にある為、巨大動物用の対策と書かれているが本当にそれだけだろうか。

世間から隔離された監獄のようなこの学院には様々な黒い噂があった。

女性は顔で選んでいるなんて眉唾物から、昔文部科学大臣まで歴任した学院長の沼田は、不透明な金の流れから相当な大金を得ているといったもので。中には女性の価値観や性格が変わった、というものもある。

そういった不透明な金の流れや、犯罪めいたものを調査し証拠を見つけることが彼女、水谷瀬莉の仕事である。

ただの教師ではなく内閣調査室に勤める特務教師なので、あまり目立ちたくないのだが――

「どうしようかしら、これ」

地面に三人の少年が倒れていた。

職員室へ行くとした瀬莉の前に立ちほだかり、一人はお尻を採みながらもう一人は肩に肘を乗せてくる。

「あの、職員室へ行きたいのですが」

「それなら俺らが案内してやるよ。その前に天国へいかしてからだけだな」

笑いながら豊満な臀部をしつこくまさぐる男にキレてしまった。肘鉄を鳩

尾にめり込ませ、一〇センチあるJカップの爆乳を揺らして男の肘を肩からどける。

「肘置きでもなければ、セクハラされて黙ってるほど気弱でもないの」

波風立ってまいとした先刻と、ガラリと口調と声を変えて、身長一六八センチと女性では大きい瀬莉よりも、頭一つ分大きい彼らを蔑む。

紺のタイトスカートと黒ストッキングとの間に生まれる絶対領域が眩しい。だけでなく絶対領域に黒のガーターベルトが映える。

マイセンのような白い肌ですらりと伸びる長い脚、熟れてタイトスカートがパンツと張った美尻に括れた腰と大きすぎる乳房。紺色スーツの胸元は、V字に切れ込んだピンクのブラウスがはちきれそうで、今にもボタンがはじけ飛びそう。

不良学生二人はやられた仲間よりも、瀬莉のグラマラスな肉体に目を奪われる。当然成熟した大人の身体だけでなく、ぱっちり大きく開く瞳に筋の通った鼻や、紅いルージュの唇が黄金比で配置された美貌にも、だ。

「へへ、すっげ。ヤベエここまで興奮したのは初めてだ」

（こいつらなんだか慣れてるわね。それに女を見る目も男というより牡、獣のよう）

「青臭いガキのお守りをしてあげるからかかってきなさい」

舌舐めずりして獲物を見据える。

「つぎけんな、このアマ」

殴りかかってきた右拳を躲しつつ懐に潜り込み、右腕を掴み勢いを利用して一本背負いで華麗に投げ飛ばす。

肩よりも少し長い栗色の髪が舞い、赤いイヤリングが揺れ、タイトスカートが捲れあがってムチムチの太腿と黒のショーツが露わになった。

「子供は大好きだけど、真面目な生徒の足を引く張る、害しかない生徒は大嫌いな」

「言ってくるじゃねえか」

残る一人が警棒を取り出して上から斜めに振り下ろすがひらひら躲し、焦れてひと際高く上げた瞬間にぐつと踏み込む。距離を詰めることで避け、どんと体当たりして男のバランスを崩すと、あとは左足を外側に軽く払うだけで無様な「大」の文字ができて、軽く急所を蹴り上げてやった。

「ひぎつ!!」

蛙の潰れたような情けない声を出して蹲る少年を、真っ赤なハイヒールで踏みつけて見下ろす。

「子供のお遊戯と租チンでいくわけないでしょ。大人のレディが好みならクサイこと言っただけでもっと心を磨くことね、坊や」

不敵な笑みと、首に巻かれた赤いチョーカーが大人の魅力を引き立てる。（あまり目立ちたくはないけれど毎回この身体で目立つことになるし、もういいか）

プロポーションによって、どこに行っても注目の的になるので吹っ切ることにした。

よし、放っておこう――そう決めた矢先に誰か大人が走ってきた。眼鏡をかけた優しそうな五十代の男性は井上というらしく、本当にどこにでもいるような中肉中背の教師だった。

「やつあの、これは違うんです」

いきなりクビになるわけにはいかず慌てる瀬莉に、彼は大きく頷いた。

「あゝ、なるほど。大変でしたね」

「え？」

「彼らによる女生徒からの苦情が多くて困っていたんですよ」

ただ有力者の息子であることと証拠がなかったため、今までどうにもできなかったのだとか。

そのまま井上が校内を案内してくれることになったので訊いてみる。

「ところで、この学院には女性を顔で選んでいるなんて噂がありますよね」

らないので勘でしかないが。  
（もしお金だけでなく女子生徒にもおかしなことをしているのなら、絶対に助けてあげなきゃいけないわね）

瀬利の武勇伝は翌日には既に全校生徒に知れ渡ったようで、男女問わず好奇心から見には来るものの、目を合わそうとすると逸らし、近付くと慌てて逃げる。

まるで鬼か猛獣の扱いに落ち込む。「水谷先生の威圧的な足音に生徒がビビって逃げていきますね」

確かにハイヒールのカツカツと硬質な足音が響くのだけだ。

「そうかしら。あまり怖がられても悲しいんですが」

普段ならもう少し気弱で優しい女性を演じるのだが、あれだけの大立回りを知られては隠しようがない。

「野村君たちを倒したのはかなり衝撃的でしたからね」

そう。実は彼らが生徒間でのボスだったらしく、ゆえに注目が大きくなってしまった。

井上が二年B組の担任で瀬利が副担任となったので、色々教えてもらいつつ情報を聞き出すようになっていた。

「まだ二日目ですからね、疲れたでしょう。ハーブティーでもどうですか」

職員室へ戻って椅子に腰かけると、井上にハーブティー入りの紙コップを差し出されたので受け取る。

（媚薬や毒の匂いはしないわね）

「ハーブのいい香りですね」

「そうでしょう。それを飲むとリラックスして、身体から力がスーッと抜けていくんですよ」

飲んでみると、井上が落ち着く声で話しかけてきて双眸を見つめられる。

あれ、眼鏡は？　と思うが、声に出すよりも脱力して背もたれにもたれかかる。

「さあどんどん顔が重くなっていきますよ。ゆっくりゆっくり顔を閉じて、開けられなくなります」

（何かしら。力が……抜けてい、く）

身体は重く怠くなり、視界はぼやけて最終的には閉じてしまう。

「カツンカツンとハイヒールの音を響かせるたび、私の命令に逆らえなくなっていくます。カツンカツンと威圧的なハイヒールの音が心地よくなり、毎日履いてきたくなります」

井上の深みのある低音が耳に沁みて、少しずつ催眠術にかかっている。

「どんなに異常な授業でも、私が言うとおかしくなりません。カツンカツンと威圧的な音を立てるたびに水谷先生の身体は敏感になり、とてもイキヤすくなります。少しずつ、少しずつ鋭敏になります。少しずつ、そのおっぱい、爆乳の感度も上昇して最後には触れられるだけでもイクまでになります。分かったら頷いて」

目を閉じたままこくりと頷くが、今の瀬利に意識はない。

「それから——」

耳元に寄せてもう一つ、暗示を囁か

れた。

「ではこの催眠術のことは、次に起きた時には全て忘れていきます。三・二・一はい起きて」

手をパンと打ち合わせると、ぱち目を開けるが何をしていたか思い出せない、何かあった気もするがどうしても思い出せなかった。いやそもそも何もなかったのかもしれない。

「どうかされましたか？」

「いえ、少しぼーっとしたみたいで」

「やはり疲れが溜まってるとですか」

そうかもしれないと愛想笑いでごまかした。

#### 四日目。

初日のようなことが起こっても体育教師なら、と納得してもらえるので体育教師として赴任していた瀬利は、職員室で水着を井上から渡されたが。

「ちよ、ちよと派手、というか小さくありませんか？」

「そんなことはないですよ。原田先生もいつもこの水着で授業してますよね」

三年の体育教師である女性の原田は当然と頷く。

「勿論です」

「そう、ですか」

（ここではこの水着が普通なのね。井上先生もああ言っていることだし、だったら恥ずかしいこともないかしら）

室内ブルー用の更衣室で白色のマイクロビキニに着替えると、胸は本当にトップをギリギリ隠すのみで、下に至

つては過激なTバックだった。

（これ、お尻隠せてるんでしょね）不安に駆られるが、実際はまるで隠せていない。菊皺が布というか紐の幅からはみ出しているにもかかわらず、生徒の前に立つと彼らは騒いだりもせず至って普通。

（ほっ。やっぱりこの水着がここでは普通なのね）

「撮影するんですか？　というか井上先生がどうしてここに？」

井上がいることに、更にビデオカメラで撮影までしていることに驚きを隠せない。

「二週間は新人に付きつきり、それがこのルールなんです。なにせ大財閥や大物政治家のご息が多く、外とは問題の質が違いますので」

（要するに外の常識は通じないってわけね）

まずは準備体操から始めるのだが、たわわに実った乳果がぶるぶるんと揺れ、一動作ごとに生徒らの目が吸い寄せられて釘付けになる。

清楚な顔立ちと暴力的なまでの肉体のギャップに、彼らも興奮を隠せない。鍛錬により引き締まった腹筋や縦型のお臍、肉感的な臀部と太腿といった健康的でありながら、魅惑の肢体に全員がごくつと唾を呑む。

三角形のマイクロビキニはすぐにもずれてしまいそうで怖い。

（布が擦れて……何？　なんだかムズムズして乳首が熱い）

（布が擦れて……何？　なんだかムズムズして乳首が熱い）



ムクムク起きるニップルを気にして生徒にお尻を向け、屈伸や前屈をする。と丸い桃尻の窄まりが丸見え。熱視線を受けて熱くなるが、まさか肛門まで見られているとは思わない。

身体を振る運動では豊乳が激しく横揺れし、腰に手を当てて後ろに反らす動きなどはダイナミックに弾む。

「水谷先生は背泳ぎが得意と聞きましたが、手本を見せてあげて下さい」(得意……だったかしら)

できるので泳ぎ始めるのだが、壁を蹴って水中に潜った際に極小水着は浮れてしまい、浮き出た肉口ケットの乳頭が見えてしまう。だが泳いでる最中に直すことなど不可能で、得意とまで言われては途中でやめられない。

(み、見られている……わよね。うう恥ずかしい)

リズムを崩さず腕を回転させて一定の速度で泳ぐ。身体の軸をブレさせないので、大きすぎる乳房が水面から浮き出て揺れる様子を、じつくりと見つめられているだろう。

泳ぎ終えた瀬莉は耳まで赤く染めてプールから上がる。

「せ、先生。俺……こんなになっちゃった……どうしよう」

股間にテントを張る男子生徒。「ええ!? あの、どうすれば」

先程問題の質が、と言われただけあって井上に伺いを立てる。

「水谷先生が救ってあげるんですよ。ほら、そのバカでかい爆乳でパイズリ

でもしてあげたらどうですか?」

「わ、私ですか!」

(何考えてるのよ、できるわけないじゃない!)

バカバカしいと心で憤慨する。

「ええ、原田先生も皆そうしてますよ」何かおかしなことでも? と言うように小首を傾げる井上。

「今は水谷先生の授業ですよ。でしたら授業中の問題は担当の教師が介抱してあげるのが筋というもの」

「確かに、そう……ですね」

(ここで拒絶したら変に思われる。今悪目立ちするのはマズイわ)

憤慨していた心はどこへやら。そうするべきと思ひ、自分で自分を納得させてしまう。

生徒の前で正座を崩して座り海パンを下ろして、ビキビキ青筋が浮き、皮が剥けて硬く勃起した肉棒をまじまじと見つめる。

(あ、う……生徒のペニスがこんなに大きく勃起して反り返ってる。私のせい、なのよね)

「い……いくわよ」

土気色で腐臭というよりプールの塩素の匂いが強い男根を、一〇一センチJカップの谷間に挟む。

「これが百オーバーのJカップ……」

「百越えって……マジかよ」

「スゲー。Jってなんだよ」

「うう先生のおっぱい柔らかい」

(熱い。おっぱいがベニスで熱くなってる)

海綿体を両側から挟んで上下に扱いていると、なぜか熟れた肉体が火照る。

「あれ、先生も乳首勃起してんじやね? きつそうだし取ってやるよ」

ビキニの紐を外そうとする生徒を咎める。

「こ、こらやめなさい。ダメよ」

「いいんですよ、水谷先生はそのまま続けて下さい」

「ですが……いえ、そうですね」

「今日一日ずっと……一度は疑い戸惑っているなんて、四日目でこんな女性に墮とすべきですね」

井上がぼそりと独りごちた。

「え、今何か言いましたか?」

「いえ何も。頑張ってくださいと応援しただけですよ」

はらりと白ビキニが落ちた。透き通るような白い肌に、肥大した淡い桜色の乳首が美しい。

「キレイなピンク色の乳首だぜ」

「やっぱ勃起してたな」

(いやあそんなこと言わないで。生徒に見られるなんて恥ずかしくて顔から火を噴きそうよ)

生徒を救う為のパイズリはできても、乳頭を見られる恥ずかしさはあり、桜色でツンと上向いて尖る乳頭を、教え子に見られて頬を朱に染めた。片手では掴みきれない豊満なJカップ、その中心に位置する乳輪は芸術的な真円を描き乳豆は硬く痛んでいる。

「はうう気持ちよすぎてチンポが溶け

そうだ」

肉棒を圧迫すると陰茎の形にフィットして、柔乳がむにゅと包み込み完全に埋没して見えなくなった。

「うをつ消えたぞ」

乳房を寄せて上下に摩擦しているだけなのに、女体が昂って仕方ない。若く肥大した男根を一〇一センチの肉ミサイルで擦過していると、ドキドキ鼓動が高鳴る。

(どうしてこんなに疼くの。塩素の匂いに混じって生臭いチンポの匂いが鼻にくると、なぜだか興奮してしまうわ)

催眠術にかけられてからハイヒールで歩くたびに敏感になり、常に発情している最中で剥き出しの牡の体臭を嗅ぎ、直に触れて、溜まっていたものが一辺に噴き出したのだ。

マシユマロのように柔らかな豊乳をぐにぐに揉んで形を変え、右は上から下へ左は下から上へ、左右でタイミン

グをずらして擦りつける。

「ああん我慢汁が次から次へ溢れてくるからオッパイぬるぬるよ」

「だって先生が魅力的で、爆乳が柔らかくてチンポ溶けそうだから」

「先生のオッパイ気持ちいい?」

「すっごく」

柔らかいだけでなく弾力もある肉口ケットを胴幹部に擦りつけ、硬いチエリーピンクの乳豆を鈴口に当てて反応を楽しむ。

「うあ、先生の勃起乳首がコリコリ気持ちいい」



(うふふ可愛い。チンポびくびくさせちゃって)

舌で亀頭をペロリと舐めるとピクンと反応を示す牡槍に、唾液を垂らして乳房を滑らせ、ぬちゆりと淫靡な音が少年らを欲情させた。

「このTバックだとケツの穴が丸見えだぜ、先生」

「ピンク色の可愛い肛門だ」

「その爆乳は何回も使ってきただろうけど、アナルは使っていないのかな」

「ふあ、あん。恥ずかしいからお尻の穴見ないで」

アヌスまで見られて口に出され、井上にはローアングルからドアップで肛孔を緻まで撮られて、羞恥心と興奮とで熱い吐息を漏らす。

(肛門を生徒だけでなく、ビデオにも撮影されて頭が茹りそう)

耳朶を舐められ、ゆつくり外を回って耳の頂上を甘噛みされ、れろり。耳の中を生温かい舌が這う。

「くはあう。はああんひゅウ脇まで!!」

耳とは逆の男子には腋窩を舐められ、内股をまさぐられて身震いを起こし、後穴を撫でられ菊皺を爪で搔かれてぞわわつと毛が逆立つ。

「先生のプリケツ柔らかいのに弾力があっていいね、最高だ」

肉付きのいい桃尻を揉まれて撫でられ、男の無骨な手がまさぐる。

極小布地の際の大陰唇を何度もいったりきたり往復して、指が這い回って

くすぐり、甘い媚電流が脳に走りじゅわあとTバックに染みができた。

エンドルフィンが分泌して舐がうつとり垂れる。

肉のトンネルを抜けた亀頭を、肉厚の色っぽい唇で啜えじゅるじゅる音を立てて吸り、吸引しつつ舌を高速で動かして先端を刺激。

「うはあ水谷先生のエロフェラだ」

「そんなこと……っ」

(これは君が勃起して私の手助けが必要だから、ただそれだけよ)

「さあもつと激しく。淫らにしているんですよ、彼を助ける為なんですから」

(んふううチンポの臭い饅えた匂いが鼻に、苦いのに美味しい? 汚いのに、舐め回してもつと味わいたい)

「んぼっんぼんぼ、じゅるるるっずちゅちゅ。身体が、熱い」

欲情に火が灯り女体が疼き、味わうほどに食欲に舐めたくなるのだ。

助ける為という免罪符を得てフェラチオは加速する。

「れろれろれろ、ずぞっ、ずぞぞ!」

激しく吸い立てながら、肉メロンで左右から圧迫して摩擦してあげる。

「くううそのバキュームフェラとパイズリ、もう抑えてられない!」

「らしなさい、先生の口にザーメン出して!」

小刻みに震える境界の怒張に、顔の動きを止めて頬がへこむまで吸引しつつ舌を苛烈に蠢かせ、亀頭を舐め回して肉幹は爆乳で扱く。

「あああ! 出る!」

口の中にどびどびゆ射精された子種が舌に乗り、喉奥へ流れたイカ臭い精液をぐくぐきゅつと音を立てて飲み干す。

(んはああこれが生徒のザーメン:ぶりぶりして臭いだけなのにアソコが疼いて仕方ないわ。あふ、舌が子種でビリビリ痺れる)

「水着がぐちよぐちよだ」

とろとろにぬかるんだ陰唇から恥汁が溢れ、Tバックの隙間から白く輝く太腿へ流れて、ぐっしり濡れた水着に秘裂が浮かび上がった。

学院と寮生活に慣れてきたある夜、瀬莉は校長室に忍び込んでいた。隠密行動で探らなければならぬのに、催眠術のせいで、いつもの服装に音の鳴るハイヒールという格好で。

(こだけ音が違う。地下室があるんだわ)

事前に入手していた見取り図、設計図には地下室などなかった。床の隠し階段から地下室へ潜入しようとする校長室の扉が開き、月明かりに照らされた井上の姿に驚く。

(なぜ彼がここに!?)

「ああ、水谷先生。それ以上奥へ行ってはいけませんよ」

「なぜ、ですか?」

(やはりこの下に何かある!)

「それ以上奥へ行くとクビになるからですよ」

だつたらなおさら行かなければならないのだが、あろうことか瀬莉は従つてしまふ。

「分かりました」

(決定的な証拠を見つける前にクビになるわけにはいかないわ)

決定的な証拠を目の前にして、催眠術にかかっている瀬莉は、井上の脇を通つて寮の部屋へと帰っていった。

九日目。

帰りのHR前に教室の前で話し込む瀬莉と井上は真剣そのもの。

「いいですか、持ち物検査では不審な物や勃起チンポがあればすぐさま没収することが大事です。水谷先生のマンコでね」

(危険物を隠し持つてなら当然ね) 教室に入った瀬莉を生徒が一樣にジロジロ見てくる。

それもその筈で今彼女はハイヒールに黒のストッキング、その上は黒の下着とガーターベルトのみのだから。その下着もニップルや女陰がスケスケで、これが抜き打ちで行う持ち物検査の正装なのだから。

当然デタラメで催眠術だが。

「抜き打ちの持ち物検査を始めます」

一人二人と窓際の生徒から鞆などを調べていく。

(うう、こんな格好なら絶対見るわよね。後ろからも前からも見られてる)

恥ずかしくてたまらないが、今はそんなこと言つてられない。



六人目に来たところで大きな猫目をカッと見開く。

「膨らんでるわよ、ズボンの中に何か隠してるんじゃない？」

男子生徒を押し倒しズボンごと下ろして取り出した陰茎は、二〇センチを超える立派な逸物だった。

「ほらやつぱり。勃起チンポは没収します！」

（没収するなら迅速にオマンコで、だつたわね）

エロ下着を脇にどけてローズピンクの肉花卉が、隆々と臍まで反り返る男根をぐぶりと唾え込む。

「はあんイイ、勃起チンポが奥まで挿入ってきた！」

（ああだめだめ、これは生徒のチンポを没収するだけなんだから私が感じちゃいけないわ……でも熱くて硬いのが奥までできる）

「うはすっげ、先生のマンコもうぬるぬるだ」

「澤田君のチンポだつてギンギンじゃない。先生の子宮まで届いてるわよ」

亀頭が子宮口に届き、最奥まで埋まった状態でずりりと腰を上げると肉壁が捲れ返り、抜けていく感覚にぞわぞわ妖しい快感が背筋を走る。

（嘘お……ただ動かしただけなのにこんなに感じるなんて。私のオマンコおかしくなってる……でも気持ちいいからまた動かしたくなるう）

男子生徒は瀬莉の痴態を見ようと寄つてくるが、女子生徒はただ座つて己

の順番を待つていた。これが普通の持ち物検査であるかの如く。

ぐぶつぐぶぶと徐々に速度を上げてピストン運動に励み、教師が生徒の上に乗って腰を振り乱す。

「先生、俺のチンポどうですか？」

「硬くて大きくて、ひぎゅ……とてもいいわよ」

腰を大きく上下させるたびにぶるんぶるん〇一センチの爆乳が揺れて、周りを囲む男子の目を愉しませた。

「見ろよあの爆乳、揺れまくってるぜ」

「あんなに揺れるおっぱい初めて見た。クラス的女子どころか、体育の原田でもあそこまで揺れなかっただろ」

二十五歳の瀬莉にとって学生の彼らは子供でしかないのだが、それでも欲望を剥き出しの眼差しで見つめられると女の部分が疼く。

「あんあんっ、おっぱい揺れるだけで感じちゃううう」

歩くたびに感度を増した女体——そして乳峰はたぶんっと大きく弾むだけで、乳悦に甘く痺れる。

卑猥なほどに大きいのに重力に逆らつて、垂れることなく丸い形を保つ。

その先端から汗が飛び散り、振り乱した栗色の髪の毛先からも、煌めく汗が飛散して牝の発情臭を振りまく。

「えろマンコで先生の子宮と俺のチンポがキスしてるよ」

「えろマンコとか言わないで、んぎい

いつ奥でぐりぐり、あひっそこオ」

「そんなこと言っても乳首とかガッチ

ガチじゃん」

ブラを外されて乳房を揉まれ、ピンと尖ったニップルを捻られると、全身を駆け巡る愉悦に煩悶する。

「こんだけ感じて本気勃起して、エロくないとか言われてもな」

ふつくら盛り上がった乳輪をくりくり優しくなぞられて身を振る。

パンパンッと乾いた音を鳴らしてむちむちの美尻を打ち下ろし、熟れた豊かな尻房が波打つ。

「おおっ、プリップリのデカケツが弾んで、尻フェチとしては最高のアングルだ。たまんね」

腰の上下が激しいほど、ダイナミックに跳ねる肉鞠が卑猥でならない。

「もう我慢できねえ！俺のチンポも没収してくれ」

「俺だつてはちきれそうだ」

肥大して血管の浮き出た肉槍は赤銅色でグロテスク、濃厚な臭気にくらから酩酊する程眼前に突き出された。

（はううん大きい。これも、これもみんな勃起して……）

「いいわ没収してあげる」

紅いルージュ引いたセクシーな唇を妖艶に舌舐めずりして、差し出された二本を麗しい手で握る。

三本の男根を同時に扱く為に、動きの激しい上下動から前後の揺すりに変えて淫らな腰振りを止めなかった。

「うをおすっげ、手でやってんのにマンコも本気で搾り取るうとしてやがる。淫乱すぎるだろ」

「私は君たちの為にやつてるのよ」

「あーはいはいそうだね」

（くはあ……オマンコとチンポが擦れてゾクゾクするう）

「身体が熱くて敏感になつてるのはどうして？」

「それは水谷先生が見られて悦ぶ変態マゾだからですね」

（あ……そうだった。私は見られて悦ぶ変態マゾだから当たり前だったわ）

井上の催眠術によって、鍛えた肉体と精神が淫らな体質に変えられる。

白百合のような美しい手も、カウパ

腺液を塗りつけて亀頭をまさぐり手淫に耽る。ただ前後に扱くのではなく、亀頭に指の腹で円を描いたり割れ目を撫でつけた。

「先生の手すべすべで気持ちいい」

「ひやううん。あひつやめて乳首だめなのお」

右の乳首を摘まれて甘電流が脳を直撃し、左の乳首を割り込んだ生徒に口に含まれてしゃぶられると、脳髓が沸騰してどぶりと牝汁が溢れ出た。

「感じすぎだろ、どんだけ敏感なんだよこの乳首」

「ひぐつুকふおおおおお。オッパイだめえ感じすぎちゃうの、んふうううもうやめて！」

「そう言われるとやめられないな。こんな敏感なエロ乳首、クラス的女子にはいなかったぜ」

ちうううと吸引され指で弾かれて、巨尻を大きくぐいんと回してグライン





一人で国を滅ぼせる  
力を持つてるって  
話だったろ？



嘘だろ？  
あそこには青騎士が  
いたはずだ

長老から聞いたか？  
あのウイスキーアが  
滅んだってという話



後は国中  
血の海だつてさ

ヘルムの森に侵入者が



——敵国を  
引き込んだらしい



なんでも青騎士の  
不在時に裏切り者が  
手引きして——



来たぞ…



いや待て  
人だ…  
あれは…



全くだ

恐ろしい話だね全く  
人間ってのはよ

何で汚らわしい  
ダークエルフが  
ここに居るっ!!

こっちは狩りの  
最中なんだよ!!

あれ…  
エルフさん達?

心優しき巨乳ダークエルフに  
邪淫の使徒が迫る!

陣主  
ちる心  
穢す  
軀体

ちっ違います  
血の匂いがしたから  
誰か怪我したと思って!

ここに俺ら以外  
来るわけねーだろ!!

とっつと  
森の隅にでも  
行きやがれ!!

漫画 ゆたかめ  
COMIC

この匂い…  
こんどこそ間違いない  
人が襲われている!!

急がないとっ!!

ザッ





うわああ  
あああ



人族の人  
大丈夫ですか？



本当は掟で人と関わる  
のは禁止なんです…  
今日は特別ですよ

助かったよ…



そうだなエルフ種は  
人を嫌い俗世と関わらない  
…だからここに来た

ある種の賭け  
だったが…

エルフの中にも  
君のような  
バカがいる事を  
期待してね



教わらなかったのか  
里の者に人族は…  
狡猾で残忍だと

ウイスキア皇国  
筆頭宮廷魔術師が  
命ずる…

心理掌握

おおおっ

ブレイン  
コントロール!!

あうっ

スクッ

さて…  
上手くいったはずだ

いぎいぎい!

答えよエルフの娘  
…私は誰だ?



成功のようだな



え…私…  
何言って…



はい貴方は私の  
愛しいご主人様です



はい…  
ご主人様…

ならば…  
どうすれば良いか  
分かるな？



私のエルフおま…こ  
自由にお使い下さい♡

だめ…やめてっ  
勝手に動かないでッ

くぱぁっ



んひいっ

なんで!?  
私の身体どうして  
こんなに!?

何故ここまで  
感じるか不思議か?

ブレインコントロールの  
際に快感神経も  
弄っておいたのだよ!!

いひい  
いひい  
いひい

イヤッ汚いっ  
やめてぬいてえっ

ご主人様に初めてを  
捧げられて私…  
幸せです♥

破瓜と同時に絶頂か  
中々出来ない体験だな

ふふ…  
そうか



カースイーター  
呪詛喰らい師外伝  
粘神排呪

小説 著井村正 挿絵 或十せねか

イラスト 藤処

速報!



三次元が文庫にて  
「呪詛喰らい師」**新作配信中!**  
コミカライズも決定!(詳しくは170ページで)



「緊急神伽の命を受けて出張してきたが、悪い予感、的中だな」

冷たい空気の澱んだ、薄暗い石室に足を踏み入れた常磐城咲妃は、憂鬱そうな溜息交じりにつぶやいた。

彼女は、「呪詛喰らい師」の異名を持つ退魔少女で、淫神と呼ばれる神の眷属に奉仕し、鎮める神伽の巫女という役職を負っている。

そんな巫女の眼前、数メートル四方の狭い石室の中央には、岩塊を削って造形された、大人が二人ぐらいいは入れそうな巨大な石瓶が鎮座していた。

無骨ながらも堅牢そうなつくりの石瓶であったが、その表面には大きな亀裂が走り、内部に封じられていたものが漏れ出てしまっている。

石瓶の亀裂から溢れ出し、床上に溜まっているのは、精液をつくりな色と質感をした、白濁した粘液であったが、精液と決定的に異なるのは、粘塊自体が淡い白光を放ちながら、ヌラヌラと這いずり回っていることだ。

「ヒルコ神系の、不定型な淫神か……この手の神格を鎮めるのは初めてではないが、覚悟が必要だな」

美貌を緊張で引き締めた咲妃は、手早く着衣を脱ぎ、常に身にまとっている革帯ポニーテージの退魔装束に包まれた瑞々しい肢体をさらけ出す。

まさに、美の神が持てる限りの力を駆使して創造したかのような、見事な女体であった。バストとヒップはその

圧倒的な量感を誇示して重力に挑むかのように突出し、ウエストは細くくびれ、伸びやかな美脚は、太腿の肉感と脚線美を究極のバランスで両立させている。その肢体を艶やかに緊縛した革帯のポニーテージが、彼女の肉体に倒錯的な色香を加味していた。

「神伽の戯、始めさせて頂きます」凜とした口調で告げた神伽の巫女は、床一面に拡がっている精液色の粘液溜まりに、そつと足を踏み入れる。

ぐじゅ……ぐじゅるるるるっ！

淡く光るヒルコ神は、獲物を見つけた粘菌のように咲妃の美脚にまとわりつき、きめ細かな肌を舐めるようにしながらヌルヌルと這い上ってきた。

「ンッ……くふうん……ッ！」

棒立ちになったまま呼吸を止め、目を閉じた呪詛喰らい師の全身を、スライム状のヒルコ神が完全に包み込む。

くちゅ……にちゅ、ぬちゅるるるるっ。粘液状の淫神は、狭い隙間にも自在に入り込み、ポニーテージに隠された秘めやかな部分にまで、冷たくヌルヌルした感触を潜り込ませてくる。

秘部を守る革帯の下に浸透してきた粘液は、繊細で淫靡な構造の女性器の隅々にまで這い込み、尻の谷間を舐め伝って、キュッ、とすべめられたアヌスの蕾にまで、冷たくぬめつた感触を伝えながら、秘めやかなすばまりの内側にまで侵入した。

(神気が染み通ってくる!!)

濃密な神気で柔肌をビリビリと刺激

しながら、ヒルコ神は極上の肢体を検分するかのようには蠢いている。

「く……んむ……ンッ……」

スライムで真空パックされたような状態の咲妃は、喉奥から押し殺した呻きを漏らしながらも耐え続けている。普通ならば、窒息してしまってもおかしくない状況なのだが、不思議と息苦しさは感じなかった。

「麗シヤ……麗シヤ……コノ身体、我ガ求メシ、理想ノ依リ代ナリ！」

突然、咲妃の脳内に、金属的な反響音混じりの声が大音量で響く。

全身に密着した淫神が、直接意識に語りかけてきているのである。

(結縁奉りまして光榮至極にございませ。私は神伽の巫女、咲妃と申すもの。御前を癒し鎮めんがためにまかり越しました……)

肉体を探るスライムに全身を委ねたまま、咲妃も意識内で言上する。

「良キカナ。ナラバ、我、汝ノ写シ身タル麗シキ姿ニテ、伽ヲ求ム……」

全身を包み込んでいた粘塊がパツクリと縦に割れ開いて、咲妃を解放した。

「私の……写し身？」

石床にへたり込み、怪訝そうに見守る呪詛喰らい師の前で、極上の肉体を隅々まで型取りした鋳型内部に、淡い燐光を放つ粘液が流れ込んでゆく。

型枠一杯にスライムが満たされた瞬間、白濁に色が生じていた。

髪は艶やかな黒に染まり、肌は白く艶めかしく、唇は鮮やかな朱が乗り、

乳首は透明感のあるピンクに色づいて突起を際立たせる。

「これは……凄いな……」

自分の姿を完璧に再現した分身が形成されてゆくのを、さすがの呪詛喰らい師も感嘆の表情で見つめている。

まるで、金型に樹脂を流し込んで量産しているかのような光景が繰り返され、数分後、外見を模した三体の写し身達が咲妃を取り囲んだ。

(こうして見ると、私の身体って、過剰にエロいな。むっ、淫ノ根までコピーされてしまったのか?)

メリハリの利いた分身達の裸身を自己陶醉気味の視点で見ている咲妃は、股間からそそり勃っている肉槍を目にして、頬をかすかに紅潮させてしまう。

呪詛喰らい師の全身をスキャンしたヒルコ神は、普段は体内に隠されているフタナリベニスまで探り当て、完全勃起の臨戦状態で再現していた。

「巫女ヨ、伽ヲ！ 我ハ三様ノ手管ニテ伽ヲ所望ス……」

声をハモらせて言った分身達が、勃起を跳ねさせながら迫ってくる。

一人が咲妃の鼻先に龟头を突きつけ、二人目は手を取って勃起を握らせ、三人目は、石床に仰向けに寝転がる。

「技巧の限り、尽くさせて頂きますはむ……あふ……んちゅっ……」

神伽の巫女は、目の前に突きつけられた龟头に唇を吸いつかせる。

(熱い！ 形だけでなく、体温や質感







光翼戦姫-ExS-TIA-

# エクステリア

小説  
NOVEL

うえだ  
上田ながの

みやこえよしつき

挿絵  
ILLUSTRATION  
宮越良月

原作  
ORIGINAL  
Lusterise



新ヒロイン・シユウヴァリエの  
華麗な活躍と濃厚な敗北陵辱が  
オリジナル小説で登場!!

「オカス。オンナ……オカス！」  
葛城真理奈の目の前にいるのは怪人  
だった。

全身を獣のような剛毛に包んだ虎を  
思わせる怪人。咆哮を響かせながら  
ギラギラとした視線で真理奈を睨み付  
けている。

（犯される。このままじゃ……）  
偶然居合わせた怪人遭遇現場。なん  
とか街の人々は避難させたものの、真  
理奈は一人逃げ遅れてしまった。

怪人の運動能力は普通の人間を遙か  
に凌駕している。一対一という状況で  
逃げ切るなど不可能だった。  
（変身さえできればこんな怪人……）

真理奈は自分の胸に手を当てる。  
異世界に存在する魔導帝国ロギアが  
作り出した怪人——真理奈は以前その  
怪人達を光翼戦姫エクスティアに変身  
することで撃退している。

そう、変身さえできればただの怪人  
に負けることなどあり得ない。  
だが、今の真理奈は変身を封じられ  
てしまっていた。

この世界を侵略するために出現した  
ロギアの第二陣——彼らは侵略の障壁  
となるであろう真理奈の変身能力を謎  
の物質イビルシードによって封じてき  
たのである。

「オカス！ オカスううううッ！」  
怪人が氣勢を上げる。

（創ちゃん……ごめん）  
ギユッと真理奈は瞳を閉じながら、  
幼馴染みであり恋人である紫峰創真に

心の中で謝罪した。

「真理奈に手出しはさせないっ！」  
凜とした声が響いたのはその刹那の  
ことである。

「えっ？」  
真理奈は瞳を開き、声が聞こえてき  
た方へと視線を向ける。

怪人も「ダレダ!?」と同様にぎらつ  
いた瞳を向けた。  
視線の先に立っていたのは、美しい  
金髪が特徴的な一人の少女だった。

「リースさんっ!!」  
少女の名を真理奈は呼ぶ。  
異世界カルロンに存在する王国パ  
ラデル。ロギアによって滅ぼされて  
しまった小国。その国の騎士にして王  
女であり、国の仇を討つべく異世界に  
まで来た少女——リース。

リースヴェルヌルシユゼットバラ  
デル——それが彼女の名である。  
「待たせたな真理奈。だが、もう大丈  
夫だ」

リースは真理奈を見て笑った。  
「ダイジョウブ？ オンナ……何がダ  
イジョウブなんだあ？」

「……貴様はもう終わりということだ」  
怪人に対してリースは笑うと、右手  
を空に掲げた。

「ブライトフェザー——エクスパンシ  
ョン！」  
再び響く凜とした声。それと共にリ  
ースの身体は輝きを放ち——

「闇が世界を覆う時、光の刃が悪を斬  
る！ 光翼戦姫エクスティア・シユバ

リエ——推参！」

リースはエクスティア・シユバリエ  
へと変身を遂げた。  
紅い髪に赤いドレス。巨大な大剣を  
手にした光翼戦姫に……。

そう、変身できなくなった真理奈の  
代わりに、今はリースがこの世界を守  
っているのである。

「エクスティア・シユバリエ……キサ  
マがオレ達をジャマしている……」  
「そうだ怪人。貴様はもう終わりだ」  
「オワリ？ いや……オワリは……キ  
サマだあああつ！」

怪人が大地を蹴る。シユバリエとの  
距離を一瞬で詰めていった。  
しかし、シユバリエはあっさりこれ  
を回避する。鋭い爪を紙一重で避まし  
返す刃で怪人の肉体を切り裂いた。

「ガアアアアッ！」  
怪人の絶叫が上がる。  
「真理奈……今の内だ。逃げる」  
果然とその有様を見つめていた真理  
奈の耳元に、聞き慣れた声が聞こえた。

「創ちゃん」  
創真の声である。  
変身できなくとも身に着けたままの  
変身デバイス——それを通じて創真が  
声をかけてきていた。

創真は戦闘のアドバイスを行ってい  
る。どこかでこの戦いを見ているのだ  
らう。

「分かった。その……気をつけてね」  
自分がここにいるのも邪魔にしかなら  
ない。

真理奈は創真の言葉に頷くと共にこ  
の場を離れることにした。

\*

「オンナ……ニガサン！」  
真理奈が逃げようとしていることに  
怪人はめざとく気付いた。

一端シユバリエから距離を取ると共  
に、真理奈に対して強烈な力を放とう  
とする。

「させん！ はあああああつ！」  
真理奈に手出しはさせない！ 強い  
想いと共にシユバリエは手にした大剣  
——パラデルに伝わる宝剣グランレ  
クスを振るった。

「ごあああつ！」  
グランレクスより放たれた衝撃波が  
怪人の動きを止める。

「キサマアアア！」  
怒りの咆哮と共に怪人はシユバリエ  
へと突っ込んで来た。

「右だ」  
瞬間、創真からの通信が入る。  
シユバリエはこの指示に従い、右に  
飛んだ。

「なっ!!」  
怪人の一撃を回避する。  
全力の一撃を避けられたことで、怪  
人はバランスを崩した。

「終わりだ！」  
この隙を見逃さない。  
「クリムゾン——バニツシヤアアア  
アアアアアアアアッ！」  
必殺の一撃を撃ち放つ。  
「ガアアアアアアアッ！」

当然回避などできるはずもなく、怪人は一撃で消滅した。

「……私の勝ちだ」

静かにシュバリエは勝利を宣言する。「ギョギョギョッ！ 残念……勝つのはボクだよお！」

瞬間、唐突に背後から声が聞こえた。「なっ!？」

振り返るとそこには怪人がいた。魚に手足が生えたような不気味な化け物が……。

見た目は魚——しかし、鱗付きの両足で二足歩行をしている。カッターのような鋭いヒレの生えた腕も丸太のように太い……。

「二体目!？」

「さっきのあいつはキミを消耗させるための囷なんだよ。本命はこのボク! マースギルなのさ! ギョギョギョッ! もらったよ……エクステイア・シュバリエ!」

「あぐああああつ!」

怪人によって殴り飛ばされる。シュバリエは何度も地面をバウンドすることとなった。

「ギョギョッ! ここまでなんだなあ」  
ダメージを受けたシュバリエに怪人は追撃を仕掛けてくる。

「シュバリエ——飛べっ!」  
「くうっ!」

バランスを崩しつつも、創真の指示に従い、シュバリエはなんとか地面を蹴って空中に飛ぶ。

「ぎよっ!？」

まさか動けると思っていなかったのか? 虚を突かれた様に怪人は動きを僅かではあるが止めた。

「いまっ! クリムゾン——パニッシヤアアアアアッ!」

再び必殺技を解き放つ。

「ギョオオオオオッ!」  
怪人の肉体を強烈な力で撃ち貫いた。

だが——

「ギョオオオ」  
怪人はまだ生きている。

(力が足りない……)

怪人は動けなくなっている。しかし、これ以上シュバリエも追撃はできない。(仕方ない……)

ギリッと奥歯を噛みつつ、一端シュバリエはこの場を離れた。

\*

「創真……回復を頼む。抱いてくれ」

ダメージを受けて動けなくなった怪人から僅かに離れた場所——街の物陰にてシュバリエは創真にそのようなことを告げる。

「抱けて……ここで?」

「今の力では奴を倒しきれない」

光翼戦姫の力は精神エネルギーであるPPだ。これを回復させるには強く感情を揺さぶる必要がある。

そのために最適な行為——それが性交渉だった。

「……分かったよ」

躊躇いつつも創真は頷いてくれた。

「ありがとう」

そんな創真に礼の言葉を告げつつ、

シュバリエは唇を突き出す。すると創真はこれに應えるように口付けしてくれた。

「んっちゅ……。むちゅっ……んっふ……ちゅっちゅっ……ふちゅうっ」

ただのキスじゃない。舌まで挿し込み、グチュグチュと口腔をかき混ぜてくれる。

(キス——ただ唇を重ねているだけなのに不思議だ。なんでこんなに胸がドキドキする? 身体が熱くなるんだ?)

キスをしているだけで、秘部が疼き出すのを感じた。

こうして口付けするのは初めてではない。だというのに、するたびにドキドキが大きくなっていく様な気がするのは気のせいではないだろう。

「創真……」

ただの口付けだけで秘部が濡れる。それを伝える様にシュバリエは自分からスカートを捲ると、強化スーツの股間部を横にずらして秘部を剥き出しにした。

「口付けだけで準備はできたみたいだ。だから……はあ……はあ……」

自然と息まで荒くしつづ、潤んだ瞳で創真を見つめる。

「分かった。それじゃあ行くよ」

シュバリエの求めを創真は理解してくる。

頷くと同時にやはりキスだけで勃起した肉棒を取り出すと、近くの壁にシュバリエの背筋を押しつけつつ、ジュ

ブツと向かい合った状態で肉壺に挿入してくれた。

「あああ……熱い……。んっく……はああああ……」

ズブズブと異物が肉壺に沈み込んでくる。

膣を硬い棒で押し広げられていく感覚が心地よかった。うっとり熱感こもった吐息を漏らす。

「これ……やっぱり気持ちがいいぞ。んんんっ……創真を私の膣中に……あつあつ……感じる」

腰が抜けそうな程の快感だった。「俺も……凄く気持ちいいよ」

創真も気持ちいいといってくれる。言葉だけではないことを証明するように、膣中でビクビクッと肉棒を振るわせたりもしてくれた。

もちろん、挿入だけでは終わらない。すぐに腰を振り始める。ジュボツジュボツと膣中をかき混ぜてくれた。

「んんんっ! 駄目だ。創真……これ……すぐ……私……まだ始めたばかりなのに……すぐ……」

ズンズンと膣奥を突かれる。膣壁をカリ首で擦られる——それだけで絶頂感がわき上がって来た。

「俺もだ。ちよつと腰を動かしただけなのに……もうっ!」

「構わない! 出してくれ。創真……私の膣中に熱いのを注ぎ込んでくれ!」

求めつつギョッと創真の身体を強く抱き締める。





利那「くおおおつ」と唸ると共に創真はドビュッドビュッドビュツとシユバリエの膣中に多量の白濁液を注ぎ込んでくれた。

「んあああ！ 出てる！ 創真の熱いのが！ イクツ！ これ……私……くううつ！ 熱いのが気持ちよくて……イクツ！ イクうううつ！」

下腹部に広がる熱気が快感に変わる。全身が蕩けそうな程の愉悦にシユバリエはビクビクと膣中で震え続ける肉棒の動きに合わせるように肢体を痙攣させながら、歓喜の悲鳴を響かせた。

「あつは……はああああ……」

（広がる……力が……満ちてくる）

同時に消耗した力が回復してくる。それを感じつつ、

（創真に抱かれるのは力を回復するためではない。そのはずなのに……何故こんなに胸が高鳴る？ どうして幸せな気分になるんだろう？）

そのようなことを考えながらシユバリエは創真の身体を抱き締め続けた。

\*

そうして回復した力は、たかが怪人如きには絶対に負けないほど強大なものだった。

「はあああああつ！」

グランレクスを振るい、怪人を斬る。

「ギョギョオオオオオッ！」

袈裟懸けに斬られた怪人の血煙が飛び散った。

「早い……まさかここまでなんて」

「終わりだああああ！」

完全な勝利を確信しつつ、怪人との距離を詰める。

「ぎよっ！ ぎよおおおつ！」

再び怪人の身体を斬る。

「とどめっ！」

完全な勝利をシユバリエは確信する。

だが――

「こ、ここまでなんだなあ」

ニタツと怪人が笑った。

同時に意味深な視線をシユバリエの背後へと向ける。

「なんだ？」

嫌な予感を覚え、振り返る。

「なっ……」

そこでシユバリエは硬直した。

「……創真……」

創真がロギアの尖兵であるギムリアン達に囚われている。意識を失った状態で……

「こんなこともあろうかと、ギムリアンを動かしておいたんだなあ。ギョギョッ！ これでキミはボクにもう手出しできない」

「……卑怯な……」

「卑怯結構……さあ、ここからはボクのターンなんだな。たつぷり楽しませてもらうよ。ギョギョギョッ」

魚の口元が不気味に歪んだ。

そして、陵辱が始まる……

\*

「それを……まさかそれを挿入れるのか？ そんな汚いものを……」

「もちろんなんだあ。このボクのちん

ぽでキミのまんこにボクの卵をたくさ……たつくさん産み付ける。いつばいボクの仔を産んで欲しいんだなあ」

言葉と共にマースギルは股間から伸びる触手型の肉棒を、両手を頭の上で触手拘束され、両足を左右に大きく開かれた状態で空中に拘束されるシユバリエの肉壺に容赦なく差し込んできた。

じゅつぷ！ どじゅつぷ！ ずじゅぶうううつ！

「ふつく！ くひつ！ お、大きい……これ、大きすぎる。くううつ！ 駄目だ！ やめろ。こんなの挿入らない！ あそこが……私の身体が……壊れる。だから……やめろお！」

挿し込まれた触手は人間の肉棒を遥かに超越するほどに太かった。ちよつとした腕くらいはあるかもしれない。

そんなものに肉穴が容赦なく拡張されていく。巨大な杭を秘部に穿たれていく様な感覚に、ビクビクビクッと激しくシユバリエは肢体を震わせた。

「大きすぎる！ 息が……できない！死ぬ……こんなの……私……死んでしまっ！ あつぐ……んぐううつ」

塞がれているのは下腹部ではないのだというのに、呼吸まで阻害されていくのを感じた。

「大丈夫。すぐに気持ちよくなるんだなあ。ほら、行くよ。ギョギョギョッギョギョオオオオッ！」

しかし、怪人は止まらない。さらに奥へ奥へと肉触手を進めてくる。

いや、それだけでは終わらない。ズ

ンツと子宮口に届くまで触手を挿し込んで来たかと思うと――

どっびゅ！ ぶびゅるるっ！ どっびゅびゅつ――ぶびゅるるるうつ！

「ふううつ！ くふつ！ んんんっ……なんだ……これ……出てる！ 私の……ああ……私の膣中に……子宮に……熱い……くううう……熱いものが流れ込んで来る……出てる！ なに……これ……なんだあああつ！」

子宮内に生温かい異物を射精でもするかのように流し込んで来た。

しかし、精液ではない。

その証拠にビュツビュツと流れ込んで来るものは一つ一つがピンポン球ほどの大きさをしていた。しかも、ゴムボールのようにそれなりの強度まで有している。

そんなものが幾つも幾つも流し込まれる。その量は尋常ではなかった。

「くううつ……お、大きい！ なんだこれ……お腹……腹が……ポコッて膨らむ！ 破れる！ くううううつ！」

当然のように下腹部が内側から膨れ上がる。まるで妊娠でもしているかのような有様だった。

「なんだこれは？ 何が……私の……うぐうう……子宮に……おっおっ……ふほおおおつ」

「なにつて……いったら？ 卵を産み付けるつてさあ。ギョギョギョ」

苦しむシユバリエを嬉しそうに怪人は見つめて来る。

「た……まご？ これ……卵？ 怪人

キュート&ムキムキ魔法使い姉妹が  
催眠魔法にかかったら—

はあっ…  
はあっ…  
はあっ…

こ…こんな集団で  
襲ってくるなんて

やっぱり夜は怖いね…  
はやく近くの街へ…

# 魔法使いとエッチな魔法

witches and erotic magic

本誌  
初登場!

漫画

とけうさぎ



僕の魔法で  
キミたちを虜に  
してヤルう…っ

なに…  
こいつ…

魔法何発も  
食らわせたよね!?

セックス…

セックスう…

ひっ





せつ性欲を  
吹き飛ばし  
ちゃえっ

魔法で!

名案!

キミが特に好みだ

おっばい...!

お姉ちゃん  
危ない...!

あつ  
詠唱やめちゃ  
だめ...!

僕の性欲が  
魔法なんかで  
なくなるもんか

3036~

ブワァァ

あ...ふあ...

リリイ...!

フヒヒ

おん

ぼっ

ワ 3036

ニ

3

3036



そんな…  
催眠魔法!?

わ…わたしだけでも  
魔法を成功させないと…!

お前も  
虜になれ



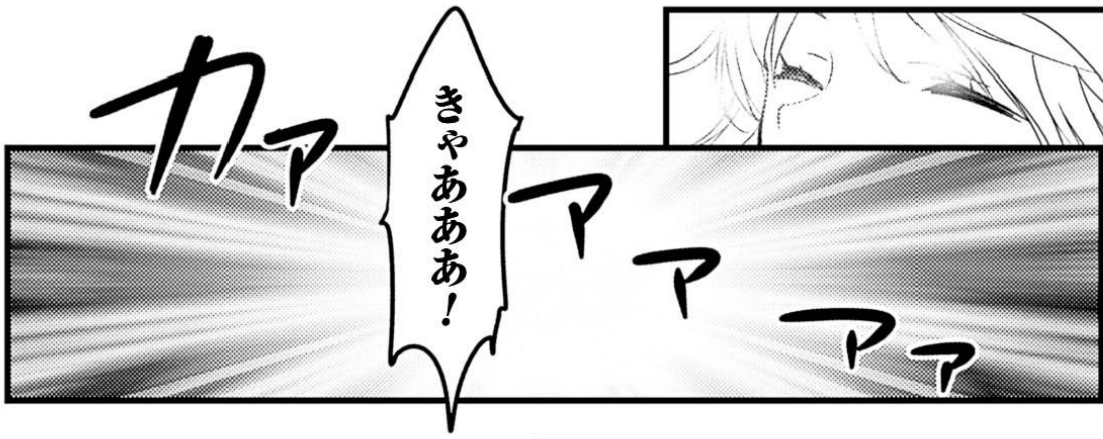
パ  
ア

ア  
ア  
ア



カ  
ハ

ア  
ア



きやあああ!

カ  
ア

ア  
ア  
ア  
ア



しん…



数日後









催眠により自身を魔王と錯覚した巫女姫  
快楽を貪る淫らな腰ふりを止められない！

# 雌犬魔王の作り方

巫女姫催眠クラスチェンジ

小説 みつやようすけ 三津谷鷹介  
NOVEL  
挿絵 ぶん ぶん  
ILLUSTRATION



ばしやり、と密やかな水音が響いた。王宮レドハルト城の最奥部に設けられた泉の湧く中庭は、始祖聖王を祀る神殿の奥の院でもある。早朝、その大理石造りの荘重な水槽の中で、一つの白い人影がゆつくりと動いていた。

人影は白い簡素な長衣一枚だけをまとった姿だったが、水に身を浸していったせいで濡れた薄い布地がびったりと肌に貼り付いてしまっている。無数の雫が伝い流れるその身体は、つんと突き出した豊かな乳房と引き締まった腹、柔らかい丸みを帯びた腰のラインが魅惑的な曲線を描き出していた。

大人でも二の足を踏むような厳しい早朝禊の行を、震え一つ見せずに勤め上げたのは、女性、それもまだ少女と言っている年齢の若い娘だったのだ。

肌が、白い。身体が冷えているためだけではなく、色素そのものがない透明感のある白さだった。昂然と上げられた横顔は、名匠が水晶から削り出した女神像かと思まがうほど美しく整っているが、それは同時に触れるのをためらわせるような潔癖さも感じさせた。朝日を弾いて光の小粒を撒き散らしているように見えるのは、その背に長く、腰に届くほどに伸ばした銀色の髪だ。

白い肌に銀の髪、瑞々しさと艶やかさを併せもつしなやかな肢体――

しかし、神代の時代の精霊のようなその姿を何よりも強く印象付けているのは、まっすぐに前を見つめる大きな

瞳だった。肌が水晶とするならば、こちらは二つ並んだガーネット。闇夜の篝火のように澄んだ真紅にきらめく様子は、うら若い少女が内に秘めた並々ならぬ意志の強さを示していた。

彼女が泉から出ると、中庭を囲む回廊から巫女装束の少女が幾人か現れてその身体を取り囲んだ。巫女たちはそのまま、銀髪の娘の濡れた長衣を脱がせて清潔な布で肌の水滴を拭き取り、新たな装束を着せ付けてゆく。

後ろに立ち、その様子を見守っていたやや年長の巫女が、やがて何かに耐えかねたように口を開いた。

「セイナ様、やはり考え直して頂くわけにはいかないのでしょうか。畏れ多くも今上陛下の妹君御自ら魔王討伐に赴かれるなど……」

セイナと呼ばれた少女を囲む巫女たちも、はっとしたように白い美貌に目を向ける。

「王家の血を引く巫女たる私でなければ、魔王を封じることができません。アノーラ、それはあなたにも分かっていることでしょう」

しかしセイナは、その訴えにも表情を変えることなく大人びた口調で淡々と答えた。

「暴虐と邪淫を好み、欲望のままに人々を蹂躪する魔王ゼオジノの存在は我が国にとつて大きな脅威です。このままでは、民の犠牲が増すばかり」

固い決意に満ちた言葉を返した後、少女たちの顔を見回しながらセイナは

わずかに口調をやわらげた。

「騎士隊も同行するのです。心配はいりません。必ず戻ってきますから、皆も精進を怠らないように」

その時には、セイナの身体は儀式に用いられる特別な装束に包まれていた。神域に一札を送ると、巫女姫は静かに回廊の奥へと足を踏み入れた。

そのまま人気のない早朝の王宮を城門に向かって歩むセイナが不意に足を止めたのは、目の前に一人の若い女性が現れたためだった。その姿を認めた瞬間、禊の行から動かなかったセイナの固い表情がまるで溶けるように消え去った。白い頬に紅色がさして大輪の花のような満面の笑みが浮かぶ。

「姉上！ なぜこちらに。昨夜も遅くまで軍議に参加されていたのでは？」

慎重深く抑えられていたが、それはまぎれもなく喜びに弾む歳相応の少女らしい明るい声音だった。

「大切な妹が危険な旅に出るというのに、見送りに来ない姉がおりますか」

目を細めてその様子を見つめる女性の整った容貌は、セイナとよく似ている。薄い寝間着の上にガウンを羽織っただけの姿にもかかわらず、ただならぬ気品を感じさせる彼女こそが、この国の女王にしてセイナの実姉であるスノーリア・デイ・レドハルト七世だった。もつとも、どこか天上の存在めいた印象を与える妹とは異なり、金髪に紫色の瞳はあくまで生身の人としての美しさを感じさせるものだ。

「ご安心なさいませ、姉上。このセイナ、姉上と民たちのためにも必ずや魔王を封じて参ります」

勢い込んで語る妹とは対照的に、姉の方は表情に陰りを隠せなかった。

「今でもまだ、迷っているわ。本来ならば、このような討伐行は国王である私の務めではないのかと」

セイナは、驚いたように自分よりもやや背の高い姉の顔を見上げた。

「紅眼銀髪の王族の娘は封魔の霊力を宿すゆえに、巫女となって国を護るのが古よりの定め。もとより、これは私のなすべきことではありませんか」

その透き通った赤い瞳が、不意にいたずらっぽく揺れてスノーリアを見つめる。

「聖王陛下の血脈を後世に伝えるのも、王家の者の大切な責務なのでしよう。それは巫女である私ではなく、姉上にしかなれないこと。そろそろ本気で結婚のお相手を選ばれては？」

若い女王の顔がぱあっと赤らんだ。

「もう、私は本気で心配しているのよ」「すみません。……お見送り感謝いたします、姉上」

「無事に帰ってきて、セイナ」

姉妹はどちらからともなく、固く抱き合つて別れを惜しんだ。

\* \* \*

「残ったのは四人か。ここが正念場だ、セイナ様のために道を開くぞ！」



満身創痍の騎士隊長が叫んだ。国を  
発つた時には十人を数えた精鋭たちも  
魔王城の奥深くに踏み込む討伐行の中  
で既に半分以上に数を減らしている。

しかし今、一行はどうとう玉座の間  
にたどり着き、魔王とその護衛との最  
後の戦いに臨みうとしていた。

「小賢しき虫けらどもが。万に一つも  
勝ち目があると血迷ったか」

玉座から立ち上がった魔王ゼオジ  
ーノが、重々しい声を薄黒い霧の漂う広  
間に響かせる。全身から凄まじい威圧  
感が放たれるが、ゼイナは初めて目に  
するその姿にどこか違和感を覚えた。

（これが魔王？ 確かに邪悪な気は感  
じるけれど）

並外れた巨体と、凶々しい形状の漆  
黒の鎧を身に着けてはいるものの、姿  
形は魔族としては中級程度のオーガ族  
のものにしか見えなかったのだ。

「お待ちください。陛下自ら下郎ども  
の相手をなさる必要はございません。  
ここはこの私めが」

玉座の傍らに控えていた魔族が立ち  
上がる。ゼイナは今度こそ全身に緊張  
が走るのを感じた。甲冑に包まれた巨  
躯に、角の生えたトカゲのような頭部。  
間違ひなく最上位魔族の一角に位置す  
る、龍人族の戦士だった。

「控えよ、アンドリユラ。久しぶりに  
我が剣に人間どもの血を吸わせるのも  
一興というもの」

しかしゼオジーンは、側近の制止を  
一蹴するとゼイナたちに突進してきた。

大きく振りかぶられた剛剣が唸りを上  
げて騎士隊長に叩きつけられる。

「浄化結界！」

ゼイナは素早く印を組み、聖句を唱  
えた。周囲が清浄な白光で満たされて、  
その中に立つ騎士隊長は、鉄塊のよう  
な大剣をたやすく受け止めた。

「むうっ!？」

驚きの声を上げるゼオジーンを騎士  
隊が取り囲む。何が起きているのか  
理解できないままもろくも巨  
体に、四本の鋭い刃が次々に振り下ろ  
されて手傷を負わせていった。

「……ほう。我ら魔族の力を減ずる結  
界か。小娘、人間風情で大した靈力を  
備えているではないか」

魔王が窮地に陥っているにもかかわ  
らず、側近である龍人は小さく呟くだ  
けで助けに入ろうとする様子はなかつ  
た。そのことに疑問を持つ余裕もなく、  
ゼイナたちは魔王を追い詰める。

「ゼオジーン！ 覚悟っ！」

「凶に乗るな！ 小娘がっ！」

目を血走らせた魔王が大剣の一撃を  
正面のゼイナに放った。騎士たちの斬  
撃を受けながらの捨て身の攻撃だった  
が、本来の速度を失った刃は巫女のし  
なやかな体捌きに易々とかわされる。

「滅びなさい、魔族の王！」

そして、ゼイナの声と同時に、四方  
からゼオジーンの身体に騎士たちの渾  
身の一刀が突き立てられた。

「ごああああアアア——」

獣の咆哮のごとき断末魔とともに、

黒い鎧の巨体が床に崩れ落ちる。

わずかの間、広間を沈黙が支配した。

（あとは、復活を防ぐ封印の儀式を行  
えば私たちの勝ち。でも、その前にま  
だこれだけの敵が残っている……!）

最大の関門を乗り越えながらも、ま  
だ緊張を解けないゼイナの前で、側近  
の龍人は突然意外な言葉を放った。

「皆、武器を捨てよ。勝負はついた」

長柄の槍を投げ出しながらの指図に  
従い、魔族の兵たちは次々に剣や弓を  
床に捨て去る。

ゼイナたちは、目の前でいったい何  
が起きているのか理解できなかった。

「な、何のつもりだ？」

巫女姫は薄暗い広間を見透かすよう  
にしながら魔族に話しかける。その巨  
体からは既に殺気のようなものはまっ  
たく感じられず、生死を賭けた戦いに  
挑むつもりだった少女はやや拍子抜け  
する思いだった。

「強い者に従うのが我ら魔族の掟。王  
を倒されたからには、倒した者に従う  
それだけのことだ」

龍人はゼイナの顔を見て、淡々と答  
えを返す。背後で、黒い霧が渦を巻き  
ながら流れていた。

「なんだと？」

「我が名は魔將軍アンドリユラ。我ら  
魔王軍一同、これより新たな魔王に  
忠誠を誓いましょう」

部下たちと共にひざまずくアンドリ  
ユラの姿を前にして、らしくもなくゼ  
イナは慌てふためいた。

「待て！ 私が、魔王だど!?! そんな  
ものになれるはずがないだろう!」

言いながら、ゼイナは軽い目眩を感  
じてふらりとよろめいた。いつの間に  
か、それまで姿を見ていたはずの龍人  
よりも、後ろで黒々と流れる濃い霧が  
視界をいっぱいに占めていて、その動  
きが奇妙な醜悪感のようなものを彼女  
の意識に呼び起こしていた。

「……魔王となれば号令一つで魔王軍  
を動かさず。例えば、人間界への  
侵攻を止める、なども思いのまま」

「なに？」

「魔王を倒した者が次の王にならぬと  
あれば、その座を巡って魔族の間で争  
うことになるでしょう。その結果生ま  
れた新たな魔王が、今の人間との戦争  
をどのように進めようとするか」

「……」

魔王を倒し、封印を行えば平和が訪  
れると考えていたゼイナだったが、魔  
族の業は想像以上に深いようだった。  
（確実に平和をもたらすには、私が魔  
王になるしかないというの?）

龍人と会話を交わしているうちに、  
黒い霧の渦はゼイナの意識を塗り潰す  
ようにさらに大きく広がっていた。ま  
るで夢の中のように意識が霞んで、冷  
静な思考ができなくなっている。

彼女は自分の決断で平和が訪れると  
いう誘惑に、それ以上の疑問を抱かず  
に身を委ねてしまいたくなっていた。

「ゼイナ様っ!？」

果然と立ち尽くす巫女姫の姿を見て、騎士たちが慌てて駆け寄ろうとする。その周囲を、素早く武器を拾い上げた魔族兵が取り囲んだ。

「貴様ら雑魚に用はない。我が「魔王」に必要なのは、この娘の類まれな霊力のみよ。……失せろ」

龍人の合図とともに、武器のぶつかる音、そして騎士たちの悲鳴が響く。それでも、セイナの真紅の瞳は先ほどの強い意志の光が嘘のようにぼんやりと焦点を失ったままだった。

「心配は要らぬ。こやつは既に、我が幻術の内にある」

アンドリュラの精神に「声」が語りかけてくる。龍人は驚く様子もなく、恭しく答えた。

（いつもながらお見事な技。では仰せの通り、この娘を次の傀儡に）

彼は一人生き残った少女に近付くと、わざとらしい丁寧さで尋ねかけた。

「さあ、返事をお聞かせください。どうなさいますかな」

「わ……分かった。魔王に……なる」少女の艶やかな唇からこぼれた返答に、アンドリュラはにたりと笑った。

「おお、光栄でございます。では早速、即位の儀式を行いましょ」

声と共に、セイナの周囲から黒い霧がほどけるように離れていった。

「魔王になるためには、この魔力の泉で洗礼を受ける必要があるのです」

アンドリュラに導かれたセイナは、

城内の奥まった一室を訪れていた。

「魔王城の中に、こんな場所が……」

セイナの目に映っているのは、レドハルト城の神殿にも劣らないほど清い水の湧き出す泉だった。

（巫女である私が、魔族の洗礼を受けるなんて……でも、こうしないと平和は訪れない）

迷いつつも近寄って水をすくうと、心地よい冷たさが掌に広がった。

「さあ、お身体を清めてください」

アンドリュラに促され、セイナは思わずそのまま長旅に汚れた顔を洗う。故郷の泉を思わせる感触に、気持ちがいであらうようだった。

セイナがうつとりとした表情で毒々しい色彩の太い肉柱に頬ずりするのを見て、アンドリュラの鱗で覆われた顔に嘲笑が浮かんだ。

今、彼らがいる部屋の中央には大きな穴が開いており、その中には大小様々の肉触手がびつしりと生えている。

自ら穴に足を踏み入れた巫女装束の少女の目には何が映っているのか、おぞましい触手の群れに臆する様子もなくしなやかな手足に巻き付くままにさせていた。

（哀れだな、娘よ。もうじき貴様が貴様でいらなくなるとも知らずに）

龍人は心の中で呟いた。

その時の目的に合わせて、様々な種族から選ばれた者の人格が幻術で書き換えられ、使い捨てにされる哀れな生

贄……。それが、人間たちに恐れられる「魔王」の正体だった。

人間の国々との戦線が広がっていく中では戦闘狂のオーガが選ばれ、そして今度は強い霊力を持つ人間の少女が魔族の長に仕立て上げられる。

（上手く利用すれば、強力な魔族兵を産みだす母体にも使えるか）

その仕組みを知るアンドリュラにとって、何度目かの操り人形交換の儀式が始まろうとしていた。

じゅるり、と粘液を滴らせながら肉蛇がセイナの足を這い上っていく。裾がめくれ上がり、人目に晒したくない白い太腿が露わになった。

もう一本のやや細い触手が上衣の合わせから胸元に忍び入り、服の下で乳房のふくらみをなぞるようにぬるぬると淫らな前後運動を繰り返す。

さらに、今度は細い毛のびつしり生えた新たな一本が、敏感な首筋をざらりと撫で上げていった。

「あ……。あは、あつ……」

巫女の鮮やかに紅い唇から漏れる吐息が、安らかなものから徐々に艶を帯びたものに変わっていく。

その細い姿は、もう半ば以上触手の渦の中に飲まれてしまっていた。

（な、何かしら、この感触……？）

セイナは、未知の感覚が呼び起こされている自分の身体に戸惑っていた。

巫女装束に覆われた下腹部、純潔を守るその場所が、疼くように脈動し始

めている。

（どうしてしまったの、私の身体は）その特異な容貌ゆえに生まれた時から巫女として生きることを運命づけられていたセイナには、この年頃の娘なら誰でも知っている性愛の知識がほとんどなかった。厳しい修行で邪念を消し去り、淫らな感情につながらるものを身辺から遠ざけて過ごしてきた潔癖な少女は、皮肉なことにとたび目覚めさせられてしまった官能にはまったく抵抗する術がない。

ぬちゅつ、ずるちゅつ……

「は……はふっ……!!」

内腿を、生暖かく湿った感触が撫で上げていく。思わずこぼれてしまった喘ぎ声に、自分自身が驚いていた。

「セイナ様。ずいぶんと感じておられるようですね」

魔族に声をかけられて、少女は羞恥に身を強張らせた。

「ばっ……馬鹿なことを言うな！」

しかし、全身が熱でもあるように火照り、動悸が高まっているのは、もう自分でもごまかしようもなかった。

（感じる、なんて……そんなこと、あつてはならないはずなのに!）

触手たちの動きは一層盛んになって

いた。表面に浮かんだ醜いイボのような突起から、濁った粘液を分泌しながら激しくうねると、セイナのまどう巫女装束は徐々にポロポロと溶け始める。布地に開いた穴から細い二の腕が、引



き縮まったお腹が、意外に豊かな量感のある乳房がのぞき、どんだんその見える範囲を広げていった。

ぬらついた触手が素肌に直接巻き付く面積を増していくにつれ、セイナは目を閉じたまま悩ましげに細い身体をよじり、唇から甘い息をこぼした。

やがて少女の肢体を覆う最後の一枚を留めていた紐が溶かされ、ばらりと解けて落ちる。自分たちの侵入を阻むものがなくなつたことを本能的に悟つたように、卑猥な形状の肉鞭が一斉にセイナの手足に、胴に巻き付いた。

「あふっ、ああっ！ あくうんっ！」

首筋、へその周りといった敏感な部分を擦られるたびに、もうセイナの口からははつきりと喘ぎ声に聞こえる切なげな息が漏れ始めている。白い肌は中から火を灯されたように艶やかな紅に染まり、しっとり汗ばんで甘酸っぱい発情臭さえ放っているようだった。

獲物の身体が十分に温まつたと分かつたらしく、一本の触手が白い太腿の間、ぶつくりとふくらんだ秘唇に狙いをつける。しかし、キノコのように傘の張つた先端が閉ざされた谷間に触れた瞬間、セイナは反射的に強く腿を閉じ合わせていた。

「だっ……ダメっ！ 私は、巫女だからっ！ 純潔を守らなくては、皆に申し訳が立たないではないか！」

「ふむ、なるほど。そういうことか」  
幻術で夢うつつの状態にあるにもかかわらず、そこだけは必死で守ろうと

する巫女姫の様子を見て、アンドリュウは何かを思いついた様子だった。

龍人がチツ、チツ、と舌を鳴らすと、

前を狙つていた触手はその先端の向きを、小ぶりだがぎゅっと吊り上がった形のいいお尻の谷間に変えた。

おぞましい肉蛇は、そのままの遠慮もなく少女の小さくすぼまつた穴に潜り込もうとする。

「……っあ！ く……んああっ！」

ぼうっと霞んだ瞳で虚空を見上げ、快楽にたゆたつていたセイナの表情が、さすがに強張つた。しかし、自分に起こつた異変を確かめようと動かす両手も、既に大小取り混ぜた無数の触手に搦め捕られてわずかにもがらせるのが精一杯だった。

ぬぶっ、ぬちぬちいっ……

その間にも、括約筋を押し広げて長い疑似ペニスが巫女のアヌスを犯していく。苦痛のためか、あるいは快楽のためか、触手に埋もれた半裸の肢体が時折びくつと震えていた。

生まれて初めての感覚——性の悦楽に戸惑いながらも、その身体の本心が震えるような快感に知らず知らずのうちに酔わされていたセイナだったが、突然排泄のための恥ずかしい穴に燃え上がるような熱さを感じてぎくりと手足を跳ねさせた。

慌ててその場所を触つて確かめてみようとしたが、泉の水で清めているはずの両手はまるで泥沼の中に浸かつて

いるように意のままに動かせない。

「な、なんで？ 身体が……」

違和感を口にするのと、触手の傘が少女の肛門を広げながらずぶりと直腸の奥に突き刺さるのは同時だった。

「はぐうううう——っ!？」

不自由な身体をのけぞらせ、声にならない絶叫を迸らせる半裸の巫女の大きく見開いた真紅の瞳から、ぼろぼろと涙の雫が溢れる。

しかし、その時セイナが感じていたのは苦痛だけではなかった。ぬるぬるしたものが粘膜の小さな穴を広げながら入り込んでくる感触は、背徳感と合わさつた悦楽も強く感じさせていた。

「こんな感覚に流されては……」

全身を貫く異様な快感に懸命に耐えようとするセイナだったが、そこにアンドリュウが語りかけてきた。

「セイナ様。やはり、感じているのはありませんか？ ならばそれを受け入れることです。それこそが、泉の洗礼が正しく行われている証」

「な、なんだってっ!？」

セイナは戸惑いながら自分の身体を見下ろした。

いつの間にか、着ていた巫女装束を脱ぎ捨て、白い裸身を晒していたが、それを疑問に思うことはなかった。「魔力の泉」に浸した身体が、これまで知らなかつた肉悦に震えている。

乳房の先端で、桜色の乳首がぴんと突き立っているのが自分でも信じられなかつた。

「いえ、やはり、肉欲に身を委ねるなどというのは、巫女として許されることではないのっ!」

「しかし、セイナ様はこれより魔王となるお方。魔族にとつては、己の欲望のままに快楽を食ふことこそ正しいあり方なのですぞ」

「か、快楽を食ふ……?」

その言葉を聞いた時、セイナは胸の奥でドクンと妖しい動悸が打つのを感じた気がした。

アヌスを肉蛇に貫かれ、全身を粘つく触手に愛撫されながら、必死にその人外の快楽に抵抗しようとしていた少女の整つた美貌が、徐々に緩み、蕩けていくのを見てアンドリュウは内心でほくそ笑んでいた。

かたくなな巫女の自制心が、徐々に快感を受け入れる方向に傾いていくのと歩調を合わせるようにして、吐息は艶めき、声は高くなつていく。ぞるうううっ!

突如、アヌスに潜り込んだままの太い触手が容赦ない動きを再開した。瑞々しい弾力を秘めた白いお尻の谷間を大きく広げ、広げられた恥孔から内側の粘膜をめぐり返しながら音を立てて激しく触手が出入りする。

「あんっ! あ……はああんっ!」

そのピストン運動に合わせてセイナの唇から迸つたのは、間違いなく官能を刺激された女が漏らす濡れた喘ぎ声だった。





# 怪傑★ マチ子さん

ごくフツウのオンナのゴと怪しい教祖様——その正体は!?



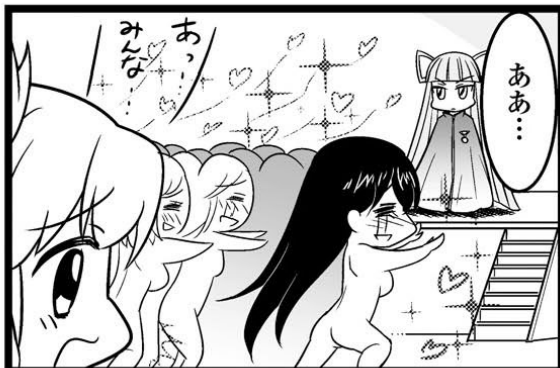
嘉納あいら

CREATED BY KAHOU AIRA

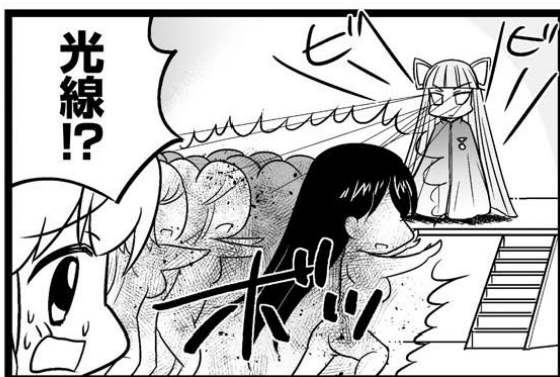
## 最初の出会



# 知りたい…



# 過去の過ち





勇者から少女へ——

女体の快楽に震える元勇者、魔王への二度目の敗北!!!



# 紅蓮の聖勇者アレン

*allen the crimson paladin*

~少女に変えられた者~

小説  
NOVEL

ぽいぽい

挿絵  
ILLUSTRATION

Aとし

魔族——誰もがその名前をおとぎ話の中でしか耳にしたことがなかった。数年前、地下深くから這い出てきた闇の眷属たちによって、人類が滅亡の危機に晒されるまでは。

暴虐の限りを尽くす魔族に人間は必死に抵抗したものの、強大な闇の力の前にほとんど為す術はなかった。

地上の生物はやがて魔族によって滅ぼされる運命にあるのだと、人間はみな肩を落として来るべき最後の日待たしかなかった。

だが闇の眷属の台頭と時を同じくして、大陸の辺境の地で一人の青年が立ち上がる。彼は各地に蔓延る魔族どもを次々に打ち破っていった。圧倒的な破魔の力と、併せ持った雄渾な意志。ひとたび戦場に彼の鮮やかな紅髪がたなびけば、人間は歓喜の雄叫びを、魔族は憎悪の唸り声を響かせたという。彼の進んだ後には火の粉とともに累々と悪鬼異形の成れの果てが横たわった。かつて大陸のほとんどを追われた人類は、今では大地を二つに分かつて魔族の軍勢と対峙するほどにまで息を吹き返した。人類を導いた彼の青年は英雄として崇められ、たったひとつの希望として大陸中にその名を馳せるようになる。

『紅蓮の聖勇者・アレン』——誰もがこの救世主によって魔族どもは地下深くへと追い返され、再び人間の栄光が甦る——そう信じて疑わなかった。

\* \* \*

「魔王様、参謀がお見えになつております」

「……通せ」

大陸の中央平原に、轟々と構えられた居城があった。畏怖と権力の象徴を禍々しく装飾したその城の最奥、玉座にふんぞり返る若い男の声が重々しく空気を震わせる。片肘をついて漫然と脚をくみかえる。誰も彼に異を唱える者などいない。なぜならこの傲岸な美青年こそが地上を蹂躪する魔族の首領『魔王』その人なのだから。

彼の目の前に恭しく跪く男——魔王

軍の参謀・ロキを見下ろしながら若王は不敵な笑みを漏らした。

「ロキ、この俺様を殺すものが唯一あるとすればそれは、退屈だ」

顔を下げたままロキは従順に頷く。

「当然、なにかおもしろい余興を持つてきたのだろうな」

「先日捕らえた勇者につきまして」

ロキの言葉に、魔王は眉を吊り上げてにべもなく唾棄する。

「あの赤髪の小僧か。仲間もろと殺してさっさと四辻に晒せ。少しは俺様を興がらせてくれるかと思いきや、とんだ期待外れだったわ。お前には失望を禁じ得んぞ、ロキ」

「お言葉ですが魔王様、彼の持つ破魔の力はたしかなもの。我らが同胞も数多く彼に倒されたのも事実であります

実際、彼の勇者が現れてからというの我らは常に苦境に——」

ロキ、と魔王はその凄まじい眼力だ

けで彼の言葉を制する。黒い瞳の奥に剣呑な気配が漂う。だがロキは動じることなく彼の考えを述べるのだった。

「ただ殺してしまうのでは我らが被った犠牲とは釣り合いかねるか。そこで——彼を魔王様の下僕にするというのはいかがでしょうか」

彼の突拍子のない言葉に魔王さえも数瞬、口を閉ざさざるを得なかった。

「クハハッ、お前は戯言を述べに来たのか、ロキ？ 奴がすんなり俺様の配下になると？ 仮にもこの俺様に立ち向かってきた『勇者』だぞ」

玉座から立ち上がり、バサリと黒衣を靡かせる魔王。屈強な体軀がはだけ、肩口から胴深くまで一閃に袈裟懸けした紅の傷跡が浮かび上がる。

「俺様に一矢報いた初めての人間だ。愚かなりには芯はある。我ら魔族に与するなら死を選ぶだろうよ」

初めてロキは顔を上げる。その顔は闇の淵から滲み出るような邪悪な笑みに歪んでいる。

「だからこそ、余興なのです」

魔王の傍らまで進み出たロキが何事かを耳打ちする。進言が終わる頃には魔王の不機嫌な面持ちは幾分薄れ、代わりにロキに劣らず妖しげな微笑がたたえられていた。

「ふん、興としては二流だが暇潰しにはなりそうだ……好きにしろ」

深々と魔王に頭を下げると、魔王軍

の参謀は溶け込むように闇の回廊へと消えていった。

\* \* \*

漆黒の馬車が荒廃した街道を足早に駆けていく。揺れる車内の中には一人の少女が腰かけていた。幼い顔立ちを俯かせ、床の一点を見つめる表情はどことなく暗い。ガタリと音をたてて黒塗りの馬車が停止すると、少女は重い息を吐き、おもむろに立ち上がった。

扉を開けると生温かい風が彼女の卵のような頬を撫でた。吊り気味の意志の強そうな瞳に、きゅっと一文字に結ばれたささやかな口唇。すつきりとした煌びやかな赤髪が風に靡き、身に着けている漆黒のミニドレスがはためく。

総じてどこか勝気な印象のある少女の外見からすれば、ひどく不釣り合いな召し物だった。さらさらとした薄い布地は未成熟ながらたしかな胸や臀部の膨らみを誇張するかのような身体の線を浮かび上がらせ、少女らしからぬ艶めかしさを醸している。

「う……っ」

風に靡く短い裾を押さえつけてなお、膝上までを覆う黒のハイソックスの間から白磁の太ももがちらちらと露わになる。眉をひそめて情けなく自らの肢体を見つめる少女。馬車を降りようとしたそのとき、不意に彼女の前に太い手が差し出されたことに気づいた。

「これはこれはアレン殿、遠路はるばるご苦労様です」

「お前は……！」

満面に微笑を備えて目の前に立つている男——身なりのいい服に身を包み、

消えていった。



でつぷりとした巨軀を揺すらせている大男を少女は知っていた。

「おお、このヴルコフを覚えておいででしたか。これはこれは恐縮の限りでございます。いやはやいつぶりの再会ですかな勇者殿……いえ、今は元勇者殿でしたかな」

ヴルコフの脂ぎった手を払いのけ、アレンと呼ばれた少女は地に降り立つ。並んでみれば親子ほどの身長差があるのもいとわず、彼女は力強い視線でヴルコフを睨み上げた。

「お前みたいな性根の腐りきった男を忘れるものか……!」

「ぐっふふふ、しかしまさかその腐った男と同じ陣営に立つ日が来るとは世の移り変わりも激しいものですね。アレン殿もずいぶんとお可愛いらしいお姿になられたようで」

好色そうな視線が身体中をくまなく舐め回るのは感じ、アレンは屈辱に顔を赤らめる。どうしてこんなことになったのか、彼女——否、彼にもわからなかった。馬車の中で散々脳裏によぎった困惑の念が再び押し寄せる。

「どうして自分はこんな身体にされてしまったのか」

魔王との決戦に敗れて捕らえられ、彼の配下として各地の視察に向かわせられて、アレンは今更ながら心深く恥じる。魔王の言いなりになるなど命をいくつ捨ててもお断りだったが、多くの仲間を今も人質にされている彼に選択の余地はない。

彼らの狙いのおおよその見当はついている。魔王に挑んだ愚かな勇者の末路——転生の呪いによって無力な少女に変えられたその無様な姿を大陸中に晒して来い、そういうわけなのだ。

「今宵はアレン殿を歓迎して、腕によりをかけた宴をご用意しております。久方ぶりの再会ですからな、積もる話に花を咲かせようではありませんか」

「くっ……!」

アレンが「魔商ヴルコフ」の治める街に来たのは初めてではない。かつて旅の途中に寄ったこの街で、この男の圧政に苦しむ民たちを救ったのは他ならぬアレン自身だった。

だがそれも、数月前までの話。街はかつてアレンが目にした以上の有様だった。街角を回るたびに、奴隷のように扱われる人々の姿が目に入る。思わず目を伏せ、怒りと情けなさでアレンはこぶしを握り締める。

（俺のせいだ……俺さえ魔王に負けなければこんなことには……っ）

凄惨な街の様子を喜々として披露しながら、ヴルコフは瀟灑な装飾で彩られた屋敷へとアレンを誘う。貧困な街並みにそぐわないその邸宅が誰のものであるかは瞭然だった。

「お待たせしました皆様、ようやく可憐な使者がお越しになりましたぞ」  
大広間の扉が開かれると目も眩むような光が迸った。同時に広間からうねるような歓声がかかる。  
「なっ……!?!」

アレンが驚きに目を見開くのも無理はない。豪奢な広間の中央には巨大なテーブルが設えられており、その周りをぐるりと人が埋め尽くしている。いや人ではない——どれもこれもみな魔族だった。いくつものぎらつく視線が憚りなくミニドレスに包まれた矮躯へと降り注ぐのを感じ、思わずその場に棒立ちになる。

「ぐふふ、せつかく遠路はるばる来ていただいたのです。今宵はアレン殿と因縁のある方々をご招待させていただきました。さあ皆様！ かつて我々に苦渋を賜ったアレン殿も今では魔王様の配下、つまりは我々の同胞でございます。過去のいざごは水に流し、今宵は新たな仲間の誕生を盛大に祝おうじゃありませんか」

ヴルコフの声にそこかしこから下卑た薄ら笑いが漏れる。壇上の特等席へと座ったヴルコフはいまだ扉の前で右のように突っ立っている少女を手招きしてにやりと口元を歪めたのだった。

「アレン殿、貴女の席はこちらです」

深々と椅子に腰を下ろしたヴルコフが、いまだに状況を飲み込めない勇者に向かって自らの足元を指さす。広間に入った瞬間から頭の中に去来した嫌な予感が、否応なく大きくなっていく。固唾を呑み、魔族どもの見つめる中、アレンは誘われるままにヴルコフの前まで歩いていく。

「跪きなさい」  
「なんの真似だ、これは……っ」

「なんの真似？ 我々はただ今宵の晩餐を愉しんでいただけですよぐふ、まずはオードブルというふうではありませんか——さあアレン殿、私のチンポをしゃぶってください」

なにを言われたのか、聖勇者はしばらく理解できなかつた。

「なにを言ってる……ふざけるなっ!」  
「ふざけてないけません。物としては上々、魔族の中でも私ほどのイチモツを持つものはそうはいません。ぐふふ、きつとアレン殿にも気に入っていただけるかと存じます」

耳鳴りがする。目の前の男がなにを言っているのか、意味がわからない。

「誰が、そんな……俺は男だぞ……っ」  
途端、広間にとどろくほどの哄笑が巻き起こる。ヴルコフもまたその巨軀を揺すらせながら好色そうに弛んだ瞳でアレンを見下ろす。

「ぐふふ、元男でしよう？ 今はこれほど可憐な少女ではないですか」  
不意になめらかな頬をヴルコフの脂ぎった手で撫でられ、露出した背筋にぞわりと粟が立つ。なぜわざわざ転生の呪いをかけられたのか、アレンは今になって本当に理解する。ただ見世物にして辱めるためだけではなかつたのだ。彼らはまさに、アレンそのものを

直接辱めるつもりなのだった。  
「そういえば貴女のお仲間は今も魔王様のもとに囚われているようですね。勇者殿がどのような態度で視察を行ったのか報告するのも私の義務なのです」

が……はてさてまさか我々の歓迎が  
気に召されないとしますと」

「ウルコフ、貴様……！」

わざとらしく困り顔を作ってみせる  
ウルコフをアレンは睨みつけることし  
かできなかった。元から選択権などな  
いのだと、ウルコフの欲望に歪んだ瞳  
が語っていた。

「この……変態野郎め……！」

「そのような可愛らしいお顔で睨まれ  
ると愚息が滾りますねえ、ぐふふ」

怒りに顔を赤らめ、拒む身体を叱咤  
してアレンはウルコフの足元に跪く。  
落ち着け、こんなことなんともない。  
アレンは自分に言い聞かせる。もとよ  
り魔王に負けたあるとき、死を覚悟し  
た身じゃないか。

「うっ……！」

それでもやはり……。促されるまま  
にウルコフの股布をめくり、目の前に  
見たこともない巨大な肉の塔が現れ、  
思わずアレンは呆気にとられる。

（考えるな、考えちゃだめだ……っ）

震える小さな手のひらがウルコフの  
醜悪な肉塊にびとりと添えられる。

「おおお……ッ！」

ウルコフが間の抜けた歓声を上げる  
のと同時に肉の茎がびくびく震え、み  
るみるうちに手のひらから溢れて屹立  
していく。思わずアレンも息を呑み、  
肉棒の成長をじつと見守ってしまう。

「さあ早く、もう待ちきれないではあ  
りませんか……！」

「わ、わかっている……っ」

ウルコフの興奮がチンポに触れた手  
のひら越しにアレンにも伝わってくる。  
変態だ、コイツ。いくら姿かたちは女  
だとはいえ、中身は男だというのに。

自分へと向けられる欲情をアレンは理  
解することができなかった。背筋を何  
度も往復する悪寒を必死に抑えつけ、  
アレンは覚悟を決める。可憐な唇から  
チロリと小さな舌を突き出し、異臭を  
放つ股座に顔を近づけていく。

「れろお……びちゅ……ちゅ……っ」

「おお、おおおっ！」

（ふぐううう……っ）

いくら無心になろうとしても、頭の  
中では苦悶の悲鳴が漏れる。舌べらに  
肉の皮が触れた瞬間、口内にじゅわり  
とクサ味が広がる。喉の奥がキュッと  
窄まり、胃の腑から胃液が駆け上がる。

「うっ……ん、ぐう……うええ……っ」

ほんの数秒舌を這わせただけであえ  
なく顔を離してしまう。無理だ、こん  
なの続けられるはずがない。

「おやおや、まったく堪え性のない勇  
者様ですねえ」

頭上からわずかに苛立つ調子を含ま  
せてウルコフが嘲笑する。

「アレン殿がよいと思うようにやって  
もらえればいいのですよ。なにをどう  
すれば気持ちいいのか、元男ならば想像  
はつくでしょう？ ぐふふふ」

「だ、黙れ……下衆が……！」

握り締めたチンポへと顔を近づけ、  
再び舌を伸ばそうとする。だがどうし  
ても触れるか触れないかというところ

で後退ってしまう。

「仕方ありません、アレン殿が奉仕し  
やすいように少しお手伝いして差し上  
げましょう」

見上げるとウルコフの手にガラスの  
水差しが握られている。容器の中には  
黄金色のドロリとした液体がたぶたぶ  
と波打っていた。

不安げなアレンの視線には答えず、  
おもむろに水差しを傾けたウルコフは、  
なんと自らの肉棒にその黄金の粘液を  
注ぎ始めたのだった。

「なに、蜂蜜のようなものですよ」  
ウルコフの言う通り、たちまち蜜の  
ような甘い香りが辺りに漂い始める。

ドロドロの粘液で満遍なく肉棒を被膜  
すると、ウルコフはいやらしい笑みを  
いや増してアレンの眼前にそれを突き  
出した。ぬらぬらと怪しく輝く肉竿と  
無言の視線とがアレンを見下ろす。

もはや意を決するしかなかった。魔  
王のもとに囚われている仲間たちのこ  
とをアレンは思い浮かべる。ほんの少  
し自分が我慢するだけで彼らに危害が  
及ばないなら、やすいものだった。

「く、う……は……れ、りゅ……っ」

舌べらを突き出し、いびつな裏筋へ  
と這わせる。今度は頭が痺れるような  
クサ味は感じなかった。その代わり、  
思わず目を見開いてしまうほどの甘美  
な旨味がアレンの舌先を震わせる。

「ちゅ、むう……ばア……れ口おっ」  
触れることしかできなかったアレン  
の舌が、ゆつくりとウルコフの裏筋を

舐めとっていく。舌を離し、アレンは  
ウルコフを見上げる。興奮にぎらつく  
双眸をひた返され、思わず逃げるよう  
に視線をそらしたアレンは、やり場の  
ない嫌悪を胸の奥へと押しやりながら、  
再びぎこちなく目の前の肉勃起へと舌  
を伸ばしていった。

「れろ、ちゅむ……れる、るう……ん、  
ぢゆるっ……れろれろおお……っ」

唾液と鼻息をチンポにまぶし、ぬら  
つく粘液を舌でこそげとると、瞬く間  
に濃紺な蜜の味が口内に満ちていく。

（なに、これ……すくく、甘い……っ）

チンポを舐めさせられているのに。  
それも憎むべき最低の男のもの。

「ぐっふうう、いいですぞアレン殿  
そう、恥垢も舐めとるのでですよ、ぐふ  
ふふ、なかなか——いやはや、これは  
なかなか……っ」

ウルコフが興奮に上擦った声を上げ  
る。アレンのさらさらの赤髪に手を這  
わせ、余すところなくチンポを舐めさ  
せようと腰をくねらせる。アレンもそ  
れを拒むことなく裏筋から龟头、皺に  
なった皮の奥までも小さな舌先を突っ  
込んでちゅるりと舐めとってしまう。

「どうやら特製の媚薬は気に入ってい  
ただけたようですねえ……ぐひひっ」

（び、やく……っ）

ぼうっとする頭の中で反芻するが意  
味がまとまらなかった。アレンは目の  
前の甘い肉棒を見つめる。本気で理解  
してしまえば単純なことだった。美味  
しいのだ。この目の前でびくびくと震



える汚らしいチンポが。それも舌が蕩けるほどに。

「さあさあアレン殿、そんなにちまちま舐めていては物足りないでしょう。ひと息にぱっくり啜えてみてはいかがですかな」

（啜える……？ こんな汚いものを、口の中に？ 誰がそんな、こと……？）

なのに。口いっぱい、コレを頬張ることができたならどんなに美味いだろう。そんな思いがちらりと脳裏をかすめる。かすめてしまえば、理性の糸がほどけるのにそう長い時間は掛からなかった。

「あ、むお……っ」

ゆつくりと引き込まれるように、アレンの小さな唇がちゅるりと亀頭を包み込んでいく。

「おほおっ——!? なんたることだ、あの聖勇者が私のチンポを……！」

随喜の声を上げながらウルコフはその光景を穴が空くほど見つめる。かつて自分を失墜させた勇者が、今や自分のチンポを美味しそうに啜えているのである。生温かい吐息がウルコフの亀頭を完全に包み込み、柔らかな頬肉と硬い歯先が交互に肉棒を揉みほぐしてくる。それだけで射精してしまいそうになるのをなんとか堪えながら、ウルコフは腰を突き出して蕾のような唇に肉棒をねじ込んでいく。

「むふうーんふうーっ!!」

「おほおほ！ たまらん、その苦悶の表情……オオオッ……なんというすば

らしい喉マンコか、おほ……ッ！」

狭隘な喉の奥をほじくり返ししながらウルコフは涎を垂らして快感を食ら。啜え込まれる側はたまったものではなかった。目を白黒させながらアレンはなんとか窒息しないようにと荒く鼻息を繰り返している。だがその実、頬を赤く染め、眉根は垂れ下がりが、おもねるようにウルコフを見上げるその表情は、もはや淫靡ささえ漂わせている。

「ちゅる……むぐ、じゅずズズ……!!」

むふう……れろれろレロオ……!!」

「ほほおほおっ——!!」

気づけばたどたどしい動きで啜え込んだ肉棒に舌べらを這わせ始めていた。幹に塗布された蜜液を一滴も逃すまいと舌肉を絡め、ちゅうつと唇を窄めて吸い上げる。口内に溜まっていく甘美な香りに、遂には我慢できずにこくりこくりと喉を震わせて嚥下する。

（あ、れ……？ だめだ、これえ……いや、なのに……おいしひ、い……♥）

胃の腑に蜜の香りが満ちていくのを感じながら、アレンは自分の中のなにかが壊れていくのを予感する。

「ぐふっふふはっ！ なにが勇者か！なにが人類の希望か！ アレン殿、今の貴女は浅ましい牝豚以下ですよ！ぐふふふ！ ほれほれ、喉奥まで馴染ませてあげようではありませんか」

「おほおほ!! げほおほ!!」

「おごおご……びゅくくん♥

興奮のあまりウルコフは亀頭の前から粘つく先汁を押さえきれなかった。

もはや果てても構わぬとばかりにチンポを喉奥に擦りつけ、腰を滑らせる。指の太さほどしかない喉穴がぐっぽりと拡張られ、開拓の証とでも言わんばかりに濃厚な我慢汁をなすりつける。まるでマーキングだった。

「おほ、オオオッ……!! アレン殿、今日をもつて貴女の口は男の欲望を掃けるためだけの道具と化すのです！その生意気な口をッ！ 二度と精臭がとれなくして差し上げますぞお！」

ぞくぞくぞく……♥ アレンの背筋がか細く震えたのは、ウルコフの言葉におどましさを感じたからではない。むしろその逆。ごちゅごちゅつと喉奥を穿たれ、舌肉を引きずり回されながら感じるのは、お腹の奥でジンジンと大きくなっていく経験したことのない甘い搔痒感に他ならなかった。

「おごっ、ごほおおオ……ッ！ んふうう——ううッ、おぶふううッ——♥」

ウルコフの腰のうねりに負けじと唇を窄め、チンポの根元まで狭窄するその表情は、今や妖しいまでに弛んでしまっていた。目尻に溜まった涙が頬を流れ落ち、頭の中で理性がいくら首を振ろうとも、可憐な唇はまるでウルコフの興奮に当てられたように逞しいチンポにつき従う。

「はぶっ、はびゅぷうっ——ちゅるっ、じゅずう……ちゅぞぞッ……♥」

「ぐほおおオオオッ！ いやらしく舌をまとわりつかせおつてえ……出す出すぞおつ！ その無垢な口まんこの

中にッ、孕め、喉まんこで孕んでしまえこの淫乱勇者めがッ！」

ぐっぽりと喉の奥に嵌め込まれた巨大なチンポがぶるると蠢動した次の瞬間、濁流のような衝撃が喉壁にぶち当たった。

ぶびゅっ、びゅるっ、びゅぐんッ♥

「ごほおおオオオッ!!」

「おほおほ……おお……ッ！ 駆け上がるっ……精汁ッ、おほおオオッ……!!」

苦悶に呻く少女の悲鳴と、間の抜けた男のため息——対照的な音色が広間に響き渡る。

「はあ……はあ……ぐふふ、そのまま口の中に溜め込みなさい。ほんの一滴でも零したら、わかつてますね？」

びくんっびくんっど何度もチンポを脈動させて、ウルコフは己の欲望を喉奥に吐き出し続ける。

やがて最後の脈動とともにぶびゅりと濃厚な精液を出し尽くしたウルコフは、ずるずると己のチンポを引きずり出していく。だがそれも完全には出さきらず、亀頭の先っぽを唇に押し当てたままにやりとほくそ笑んでアレンの紅髪を愛おしげに撫でさすった。

「ほれ、口の端から零れていますよ」

ひと雫の精液が唇の端からツウと垂れ落ちていく。

肉竿の先とキスしたまま、アレンの震える瞳がウルコフを見上げる。弱々しく目尻を垂らし、媚びるように見上げてくるその双眸にもはや勇者の面影を見つけるほうが難しかった。ねつと





りと汚れた唇を花びらのように窄め、  
鈴口から零れ落ちていく出瀬らしをぢ  
ゆるるとアレンは舐めとる。もう蜜  
の味はしなかった。代わりに苦く酸い  
のある濃厚な味がじわりと舌先に広が  
り、やがて口の中いっぱい溜め込ま  
れたそれらに溶け込んでいく。

「ん、む……んぶあ……っ♥」

仄かに上気した頬にヴルコフの肥え  
た手のひらが優しく添えられ、親指で  
つぷりと唇の端をこじ開けられる。

「ぐふ、ぐふふふ……!」

されるがままに開かされた口の中  
は、黄ばんだヴルコフの子種汁が口蓋  
から何本も粘つく糸を垂らしながら渦  
巻いていた。

「よろしい、飲み込みなさい」

最悪の命令がいつも呆気なく下され  
る。排泄したての熱々の精汁。涙の滲  
む瞳でヴルコフを睨んでも、ただにや  
にやといやらしい笑みが返ってくるだ  
け。本当に臭いが染みついてしまいか  
ねなかった。もう染みついてるかも  
しれない。アレンは意を決してごくり  
つと高らかに喉を波打たせる。そうす  
るしか他にないのだ。

「ごきゅっ、ごきゅんっ……んぐっ、  
ふううう——んふうう——っ♥」

粘つく精液が喉に絡みつく。何度も  
えずきながら喉頭を震わせる姿はも  
や滑稽でさえある。青臭い鼻息をふう  
ふうと漏らしながら敵のザーメンを飲  
み干す少女に、広間中から容赦のない  
罵声が浴びせかけられる。

「んぐっ、ゴクンッ……ぶはっ、んぶ  
ああ——あふっ、おえッ……これで  
……いいん、だろ……んむうっ?!  
ぐ、むおおっ……ゲえッふううっ♥」

飲み下した特濃精液の量を考えれば  
それも当然のこと。喉に詰まった半固  
形の汁が逆流し、辺りに精臭が立ち込  
めるほどの盛大なげつぷが広間に響  
き渡る。魔族たちの嘲笑はいよいよ高  
まりを帯びていくのだった。

ふとヴルコフの視線がアレンの胸元  
に止まる。ポタポタと白濁汁の垂れる  
柔らかそうな肌の上に、二つの突起が  
ぼつんと浮かんでいるのである。

「おやおや、アレン殿。これはいった  
いどういうことでしょうか」

「あ、うう……?」

足の爪先にミニドレスの裾を引つか  
け、めくり上げる。漆黒のドレスの裏  
側から火照りに赤らんだ少女の麗しい  
素肌がまろびでいく。いかにも外見  
に似合わないいやらしい黒下着の中央  
に船底形の染みがくつきりと現れてい  
た。さらに足を伸ばし、胸元を覆う布  
地を乱暴にずり下げる。仄かな膨らみ  
のある生乳房がふりりとヴルコフの  
眼下に晒される。その頂に息づく小さ  
な二つの蕾は服の上からも明瞭にわか  
ったように、ぴんっと凝り固まって天  
を向いている。

「さすが魔王様の転生術……完璧な女  
体ですなあ、ぐふふ」

「んはああ……ッ」

アレンの背中がびくつと反り返る。

こんもりと盛った乳量の中央に、充血  
して痛々しいほどに勃起した乳首——  
その敏感な突起をヴルコフの肥えた足  
指がぎちぎちと抓り上げていた。

「んふううう……ッ♥」

指の腹で乳首を撫でられ、思わずア  
レンは両手で口を塞ぐ。

（な、あ……変な声、出るう……っ♥）

びりびりと胸の奥に響き渡る甘い電  
流に、アレンは恍惚と天を仰ぐ。

「ひんっ♥」

もう片足でショーツの染みを撫でら  
れ、まるで少女のような弱々しい悲鳴  
とともに細い腰がぶると震えた。

ぐしゅっ、ぬちゅっ、にゅち……!  
ぬるぬるとした牝蜜が溢れ、下着の  
中心にさらに濃い染みがじゅわあつと  
広がっていく。

「まさか私のチンポを啜えて発情して  
しまったわけではないでしょうかなあ?  
こうやって足でいじくられるだけで  
も感じるのでしょうか? ええ?」

「ふざけ、んなあ……あふあっ……♥  
誰が、足なんかでえ……んんんッ♥」

乳首と股座をいじられながら、あれ  
だけ精を吐き出したヴルコフの股間が  
再びそそり立っていくのをアレンは目  
を見開いて見つめる。思い出したよう  
に口の中にこびりついた精臭がツンと  
鼻を突き、ぞくつと背筋がわななく。

くちゅつくちゅ、くちゅあ……!  
（あ、あああ……♥ なんだよお、  
なんなんだよお、これええ……♥）

「ぐふふ……アレン殿、今宵は女に生

まれ変わった貴女に、牝の悦び」とい  
うものを存分に教えてしんぜますよ」  
そう言ってヴルコフはアレンの細腰  
を抱えて易々とテーブルの上に持ち上  
げる。暴れる少女をものともせず片手  
で膝の裏をぐいと押さえつけ、黒下着  
に包まれた肉付きのいい少女の秘所が  
ヴルコフの眼前に曝け出される。

「おお、おお、なんと淫らに熟れきつ  
ていることか」

「や、やめろ……なにを、して……  
……!」

ショーツの裏でぶつくりと快楽に膨  
れた姫割れを、ヴルコフの無遠慮な手  
がなぞり上げる。それだけでビリビリ  
とした甘い痺れが下腹を駆け抜け、ア  
レンは身を振って純白のテーブルクロ  
スに皺を作る。

「男女がこのように重なり合えばやる  
ことはひとつしかないでしょうに」

「ま、待て!」

突然アレンが血相を変えてヴルコフ  
を静止する。魔城から送り出される前  
に口キから言われた言葉が脳裏をかす  
める。そのときは馬鹿馬鹿しいと気に  
も留めなかった。「視察の間、処女を  
守り通すこと」それが仲間を解放して  
もらうための条件だった。

「存じていますよ。この瑞々しい果実  
を今すぐにも堪能したいのは山々で  
すが……残念ながらアレン様が望まぬ  
限り、こちらには手を出さぬようと  
のお達しですからね。ですので」

ヴルコフの手が例の水差しへと向け



あてが  
外れたけど  
結果は同じね

あてが  
外れた…ねえ

くりから  
九里空は  
どうした？

エンジュ合流！  
戦闘天使の本領発揮なるか？



ちゃんと  
保健室に  
運んだわよ

# 思春期な アダム

天海雪乃 原作  
さかき 絵

EVIL EYES



…ってなんで  
沙耶のこと  
知ってるのよ!?

……地遊尼さん



藤田君が  
神経毒プログラムに  
汚染され危険な状態



彼は藤田君の  
蘇生を続けている  
戦線復帰困難



睦月が？  
里輪はどうしたの  
あいつもいた  
はずなのに



ゆえに私たちだけで  
ミスCからプログラムの  
解除キーコードを  
聞き出す必要がある

共闘を  
要請する

共闘？  
バカじゃない？

ならば  
相互不干渉の  
確認を



みんなと  
ケンカしないで

エンジユ……

ま...たしかに  
アンタの相手まで  
してる余裕は  
なさそうね

シヤアアアッ!

双噴射ッ!!

前号までの  
あらすじ

睦月を狙うNETUSの刺客 黒猫の正体は担任教師の  
勝江だった。猛毒を打ち込み睦月を手に入れようとする黒  
猫にマキナが立ち向かう。そこにNETUSも合流して...





熾結界ッ!

効くか  
そんなも

グッ!?



!!  
放蕩<sup>ほうたう</sup>KKが  
壊れている—

地遊尼さん  
炎を使って…  
援護する

あたしに命令  
しないで!

彩<sup>いろは</sup>早<sup>はや</sup>閃<sup>せん</sup>ツ!!

はあ?!

曲<sup>まが</sup>熱<sup>あつ</sup>纖維<sup>せんい</sup>展開<sup>てんかい</sup>  
正<sup>ただ</sup>弦<sup>げん</sup>ブー<sup>ー</sup>スト





これでおしまいにしてよう——  
ヤミヨちゃん！  
メイの決意、それを揺るがす闇魔少女の非情な罠！



# 光魔少女 メイ

拘束魔具の虜

第3章 魔少女の罠、明かされる真実

小説 たかおかちから 高岡智空

挿絵 くさかみあきら 草上明

「芽衣、私に隠し事をしていますか？」

「……ふえ？」

あれから——唇と尻穴をレイプされた、あのおぞましい日から、一週間と数日が経過した頃。生徒会室での仕事中に、八千代から投げかけられたのが、そのひと言だった。

「ど、どど、どうしてそんな——なにもないよ？」

「……………私の目には、芽衣の目がトリアスロンでバタフライしているように見えますが」

慌てて両目を手で隠すと、おそらく頬を膨らませているであろう八千代は、不満げに返す。

「誤魔化さないでください、芽衣！」

「ご、誤魔化してなんて……本当に、なにもないから……って——」

そつと指を開き、隙間から彼女の顔を見つめ返すと、その顔は怒りではなく、哀しみに溢れていた。

「ど、どうしたの、八千代ちゃんっ？」

「芽衣が……隠し事をするからです……」

肩を落とし、俯いた彼女のそんな呟きに芽衣はなにも返せず、グツと言葉を詰まらせる。

「どうして——そう、思ったの？」

なんとかそう答えると、八千代は本当に心配そうな表情で、訴えかけるように告げた。

「最近、一緒に帰る機会が少なくなりました」

「それは……クラスが隣になっちゃったし——」

「それだけじゃありません……気づいていないんですか？ 芽衣が水泳の授業で体調不良を訴え、保健室で寝込んだって……あの日から時々、芽衣は暗い表情を見せるようになってるんですよ」

「……っ！」

八千代の指摘に思わず動揺し、背中に冷たい汗が伝ったのを感じる。

「悩みがあるなら、きつと相談してくれるはず……そうでないなら、自分で解決するのでしょう、と。」

そう思っていたのですが……

困ったように眉根をひそめた八千代は、それを口にしていかどうか、迷っているようだった。

「数日待っても、芽衣の表情は晴れませんし……それどころか、苦しそうな表情まで見せていて——解決できないような、重病とかなのではないか？」

「っ——それは違う！ そんなんじゃないのっ！」

まっすぐな返事ができたおかげで、八千代は信じてくれたようだ。

「そう、ですか……それなら、ひとまずは安心しました。では……次は、その表情の理由を教えてください。私にも、なにかできるかもしれせん」

「っ……それ、は……」

ジィッと見つめてくる八千代の瞳は、心の奥底まで覗き込んでいたようだった。吸い込まれそうな黒い輝きを持つ、黒曜石のような瞳。思わず誘われ、そのまま秘密を明かしてしまいたいようになる。

「それ、は……」

けれど——もれかけた弱音と本音を、なんとか飲み込む。下手なことを言えば、そのことで八千代が危険な目に遭うかもしれない。汗を拭うように顔を擦り、芽衣は無理やり笑顔を浮かべて答えた。

「病気ではないんだけど……その、お恥かしいことに……奥歯がね、虫歯っぽくて……」

「……はあ？」

八千代らしからぬ間の抜けた、でも可愛らしい頓狂な声の反応と、呆れたような眼差しが痛い。

「……それは、歯医者に行くべきでは？」

「それが怖くて……で、一週間も——」

「っ……なにをしているんですか、あなたは！」

そして叩きつけられた雷のような怒声に、芽衣は涙目になって頭を抱える。

「うひいっ！ や、あの……ほんとにね？ あのキユーイイイッという、独特の音が……」

「なに子供みたいなこと言ってるんです！ まったく……心配して、損しました」

冷めた視線をチラリと寄越したあと、再び書類仕事に戻っていく八千代の言葉に、なにも返すことができなかった。嘘を吐いた、隠し事をしている、その罪悪感も手伝わっている。

「うう、ごめん……」

「……嘘ですよ」

だが——そんな芽衣に、八千代は柔らかく微笑んでそう言った。

「心配して、損だったなんて……ちつとも思っていない。誰でも解決できる、小さなことでよかつた……ふふっ、そう思いました」

「や……八千代、ちゃあん……ううっ……」

隠しきたという安堵もあるが、なによりも彼女の思いやりが、ジンと熱く胸に響く。

「うわあああああんっ、愛してるよおおおっ！」

思わず涙ぐんだ芽衣が抱きつこうとする——と、八千代はその腕をスルリと回避した。そして芽衣の前に置かれていた書類を奪い取ると、自分の未処理書類の上に重ねてしまう。

「……あれ？」

「これは私が処理しておきますから……芽衣は今日中に、歯医者に行つてらしてください」

ニッコリと満面の笑みではあるが、その中に底冷えするなにかを感じ、芽衣は背筋を震わせた。

「や、八千代ちゃん……お礼のハグを……」

「結構です。ではごきげんよう——また明日♥」

「……はい、お疲れさまです」

仕事の継続は許されないと諦め、芽衣は荷物をまとめると、ノロノロと立ち上がる。そして直後に感じた刺激に、表情を僅かに歪めた。

「ほらご覧なさい、早く病院に行かないからです」



それじゃ、お先に……ま、また明日っ……」  
声を震わせ、けれどなんとかそう答えると、芽衣は生徒会室を後にし——足早に駆けだした。

向かった先は、いつかも利用しようとした、体育館裏の人数がないトイレだ。そこでなければ、大声をださざるを得ないこの行為には耐えられない。  
(っ……今日も、八千代ちゃんにはバレなかつた……それは、よかつたっ……けどおっ……)

秘裂と菊壺を支配してただけの肉触手は、あの日からさらに勢力を拡張し、いまや下腹部全体を支配するほどに広がっていた。そしていま——。

「んっあああつ！ だめっ、いやああ……そんな、いっばい……ペロペロしちゃ、だめええ……」

一週間に上の時間をたつぷりと使い、芽衣から魔力と快感の証を貪り尽くした触手は、全身を包むレオタードのようになり、身体に密着している。

表皮は、芽衣の肌となんら変わりなく見える、精巧な人工皮膚のように身体を覆っている触手膜。けれど内側は、淫部の媚肉を思わせるような赤い粘膜で満たされており、それら粘膜は伸縮自在の肉触手そのもの——それが、芽衣の現在の肌着なのだ。  
(こんな、ことっ……八千代ちゃんには、言えないっ……絶対、言わないっ……絶対、こんなことにつ……巻き込んだじゃ、ダメなんだからっ……)

弱気な心を叱咤する芽衣だが、触手から伝わる刺激には、表情が歪んでしまう。この触手スーツはなにもせずとも常に全身を弄り、無数の人間の指や舌で愛撫されるような感触を注ぎ続けていた。  
「かっ……身体中、全部うっ……んぐっつ、ドロドロッ……ドロドロにいつ、なっひやううっ……」

首筋から太ももの真ん中までの、胴体はすべて触手に苛まれ続け、腕も二の腕の半ばまでが包まれてしまっている。常に触手の海へ浸かっているような

状態にありながら、芽衣は日常生活のために、いつも通りの行動をしなくてはならなかつた。

蕩けきつた尻穴を幾度も穿り返され、勃起しつ放しの乳首や陰核を舐め回され、触手で縛られ、扱かれる日常——まさに快樂地獄である。  
「あくうううんっつ！ そこっ、そこおおおっつ、おぐっつ、んっつおおおお——っつ!!」

ビクンツツと大きく背を跳ね上げ、トイレに腰かけたままの芽衣は、ひと際大きな絶叫を響かせた。何度も腰を前後に振り立て、便器の中に溢れた愛液と小便をジョボジョボと吐きださせられる。  
「はああつ、はあつ、んっ、んんううっ……」

絶頂の余韻にガクガクと全身を震わせ、芽衣は涎とともに熱い吐息をこぼしていた。ここが人気のないトイレでよかつた、心の底から安堵する。だが、その安堵に浸る余裕すらなく、腸からせり下がってくる圧迫感に、敏感な尻穴がフルツツと切なく震え、蕩けるように押し開かれた。

「あつううんっ……んおっ、おおおっつ……」

排便の感触にさえ、気が遠くなるような快感を味わいつつ、不浄の塊をポチポチと水面へと吐きだしてゆく。尻穴を通過し、抜け落ちる感触に、思いたくもないはずの、男子生徒からのアナルレイプが思いだされ、ゾクリと背筋が震えた。  
(なん、でええ……ひぐっつ、あつ、はあああ……オマンコ、またあ……あつ、くう……んっ……)

先ほどの絶頂とは関係のない、新たな愛液がトロトロと蜜壺の奥から溢れるのを感じ、芽衣はカアツと頬を赤らめる。だが、いつまでも恥じ入ったり、自己嫌悪に苛まれたり、シヨツクを受けたりしている余裕はない。芽衣は放課後の密かな恥辱を嘔み殺すと、後始末を終え、小声で外に呼びかけた。  
「……シユカ、もう大丈夫……っ……」

生徒会室を出てからすぐ合流したシユカを呼ぶと、

先の行為に続き、次は魔力的な処置を行う。

「わかつたわ……じゃあ、かけ直しましよう」

かけ直す——というのは、肉体の反応を押さえつける、防衛魔法のことだ。触手の著しい成長のせいで、なにも手を施さなければ、芽衣は日常生活さえ送れないほどのアクメ地獄に晒される。

そしてそれを終えれば排便——と、一秒たりとて気を緩める時間は与えられない。授業中にそうなつてしまえば、そう何度もトイレに抜けだせないことを考えると、もろすしかないのだ。屈辱の中、芽衣はオムツを装着して学校に通うこともあり、それに合わせ、影響を限りなく少なくするため、防衛魔法も行使するようになったというわけだ。

「これも、魔力が傾いちやうんだよね……」

「弱い魔法だし、二人で使えばあまり影響はないわ。芽衣の魔力は、まだ光に強く傾いているわよ」

腕に絡みつき、魔法を施すシユカが慰めるように——否、申し訳なさそうに言った。だが、彼女が毎日、触手を外そうと魔力を注いでいることは、芽衣もよく知っていた。だからこそ、気にしないようにと返し、笑みを浮かべる。

(そうだよ——いまが、頑張りどころっ！)

学校を休むことも考えたが、ヤミヨが学校の誰かであることも考慮すれば、芽衣が休んだ瞬間に、学校中がどう変貌するのか、想像したくもない。最悪の事態を避けるため、芽衣は触手スーツとオムツに制服を着用し、皆勤登校を続けていた。

(なんて——そんなこと、八千代ちゃんに言えるわけないよ……ごめんね、八千代ちゃん……)

心の中で謝罪をしつつ、仕方のない嘘なのだと言いつつ、何度も繰り返していた。

「だけど——ヤミヨちゃん、動かないね……」

後ろめたさを誤魔化すように、そうポツリと呟いた芽衣の言葉に、シユカもしばし考え込みながら

それをまとめるように言葉を紡ぐ。

「おそらくだけれど……この触手の成長を待っているんだと思う。だけど、私が魔力を注いでいることが阻害になって、完全には成長してない……」

「ええっ!? こ、これ以上、育つの……?」

「それはわからないわ。けれど、こんな状態の芽衣を放っておくなんて、それ以外……あとは、この状態を把握できていないということくらいしか、考えられないわね」

だがその可能性は、授業中にすら芽衣を監視し、闇の影響を受けた生徒を送り込んできた現状を思えば考えづらい。ヤミヨにもなんらかの思惑があり、そのためにいまの芽衣を泳がせている、ということなのだとはおぼろげに感じるのだが――。

「いずれにせよ、動いてこないならチャンスよ。もう少しでこの触手は剥がれる……乖離が始まっているの、芽衣も感じているはずだわ」

「え……そ、そうなの、かな……?」

実際のところ、触手による愛撫の影響は日増しに強くなっており、快感が増幅されてさえていると、芽衣は感じていた。だがシユカが言うならそうなのだろうと、曖昧に微笑んでお礼を言っておく。

「……ありがとう、シユカ! 私、頑張って我慢するからっ……これが外れたら、いままでの遅れも取り返して、しっかり調査しようね!」

「そうね――任せておいて、芽衣」

と――そんな話をしているうちに、時間が少し経ちすぎてしまった。眠ったようにおとなしくしていた触手が寝返りでも打っているのか、ピクピクと蠢きだし、媚肉へ刺激を与えてくるのを感じる。

「や、ばっ……い、急いで、帰ろっ……」

「大丈夫よ、防衛魔法がかかっている――焦らないで気を静めて、触手を刺激しないようにね?」  
小声でささやき、コクコクと頷き合って、芽衣は

シユカを伴い速やかに帰宅するのだった。

「……………ふふっ……」  
その光景を魔力の鏡で覗いていた邪悪な少女が、唇を歪めていることも気づかず――。

◇

それは先日の会話を聞かれてでもいたような、あまりにタイミングがよすぎる――否、悪すぎる襲撃だった。

「つつ……ヤミヨちゃんっ……」

「お久しぶりねえ、メイ……」

早朝よりどんよりと曇った天候で、身体の変調もあり、家を出るときからひどく憂鬱だったのは、この状況を予期していたからだろうか。到着した学校に渦巻く闇の魔力が、いつもより濃く、量も増していることに気がついた芽衣とシユカは、すぐさま原因と思われる旧校舎に向かったのだ。

その結果がこれ――ヤミヨの待ち伏せと襲撃だ。旧校舎一帯に闇の結界が張られ、その内側に誘いこまれたメイとシユカは、無数の闇生物とヤミヨの魔法を相手に立ち回ることを強いらられる。

「アイーグ・ブラッスークツツ!」

魔法を放って感じるのは、以前ほどの魔力が杖に流れ込まず、魔法にもそれが乗りきらないということ。放った突風の弾丸が闇生物を貫き、無に帰してゆく手応えはあるが、いまひとつ本調子ではないのを感じさせられる。おまけに――

「あはははっ! 魔法のキレもそうだけれど……少し、身体の動きが鈍くなっているのかしら」

「そんなことっ……んっ、くあああっ……」

ヤミヨの放った緩やかな炎の弾丸を回避した瞬間、不意に全身を電流が駆け抜けたような痺れに包まれ、ズクンツと下腹部が疼きだした。

（しまった――そう、だっ……こは、闇の魔力が大量にあるからっ……闇生物の、触手もっ……え、

影響お……ひぐつつ、んつくうつつ!）

いけないと思った瞬間には遅く、身体を包み込む粘膜スーツがザワザワとうねりだし、肌という肌を舐め上げてゆく。

「んっあああああっつ! やっ、あひいつつ!」

立っていないかと思ふ気持ちと裏腹に、尻穴を抽挿し、結腸を突き上げた触手の動きに腰が引け、ガクガクと膝を揺らしながら崩れ落ちてしまう。

（こ、れえつつ……あああつ、ダメええつつ! くつ、るうつつ……んくつつ、きひやううつつ!）

ゾクゾクツと背筋が震え、触手の粘膜に包まれた股間に、ドロドロと牝蜜が染み広がるのを感じさせられていた。感覚はこれ以上ないほど抑え込んでいるはずなのに、魔力の影響ゆえか、触手の感覚が異常に鋭く肌に食い込み、神経を蕩けさせ、それが性感帯を甘く痺れさせてゆく。

「おぐつつ、ほつつ、んっおおおつつ……」  
淫核と乳首を触手糸で縛り上げられ、扱かれる狂おしいほどの快感が、メイに胸元と股間を掻きまらせる。内股に崩れた脚が少しずつ倒れ、とうとう地面に膝をつき、手の平をついて、蹲るようにへたり込まされてしまう。

「ふふっ……私のサキユミミックと、随分仲良くしていたようね。数秒でそこまで気持ちよくさせられるなんて、よほど相性がよかつたのかしら?」

「ら……らへ、がああ……んぐつつ! き、きもひつ、よきゅ……な、なんれえ……ひいんつつ!」

反論しようとする、凄まじい刺激が両穴に広がり、下腹部を突き抜け、ピクンツと背筋が跳ね躍った。大きな胸を揺らして反らし、痺れが四肢の末端にまで広がってゆくのを感じる。

（んぎゅうううう……ら、めええ……お、オマンコお……ひゅぐつつ、ジクジクツ、ひてるうつつ……）

「――これでおしまいね、メイ!」



杖を握る指の力が緩む——それを見定めながら、ヤミヨのステッキである乗馬鞭が、ヒュッと風を切つてメイのほうへ向けられた。

「くっ……ル・ソレイ・テール……」

震える声で懸命に詠唱を紡ぎ、輝いたバトンの先端を差し向けるが、尻穴に埋まる触手が腸内で一回転した瞬間——螺旋に挟られた菊髪が蕩けるような快感に包まれ、その手から杖が滑り落ちる。

「んぐううつつつ!! はっ、ぐつつ……」

「……ヌワール・リユーネ・ヴェルグ——」

肌を刺すような凄まじい圧迫感とともに、膨れ上がった闇の魔力が、怒濤の勢いで押し寄せてくる。飲み込み、押し流そうと——否、このまま押し潰そうというヤミヨの意志を感じる攻撃だった。

（つつ……最後まで、諦めないっ……）

覚悟を決め、けれど瞳は閉じず、カタカタと震える腕を懸命に押さえつけ、拾い直した杖にありつたけの魔力を注ぎ込む。煌々と輝く杖先から光のペールが広がり、メイを保護するように包み込んだ。

「無駄よ——」

不敵に、歪んだ笑みを浮かべたヤミヨが、さらなる魔力を杖に注ぎ込む。見ただけでわかるほど、現在のメイの魔力容量とは圧倒的な格差があった。

（私、こんなに弱く……でも、まだまだっ!）

だが——それを前にしても、メイは最後の一秒まで諦めようとは考えない。いや、最後の一秒を迎えたとしても、自分が闇に吞まれるまでは、決して諦めないだろう。なぜなら——

「——オベ終了。メイ、内側から魔力放出!」

「つつ! わかったよ、シユカッ!」

なぜなら——頼もしい相棒が、この限界ギリギリまでメイの身体に干渉し、忌々しい触手を除去しようとして奮闘しているのだから。

「アンユベーリユ! ビスキュ・シエア!」

「なっ——」

体内に魔力を凝縮し、それを弾けさせる——最初に幾度も試し、それでも触手にはなにも影響を与えられなかった、自身の闇を取り払う防護技術。それを行った瞬間、身体中の肌と粘膜の一筋一筋からおぞましく絡みついてきた触手の感触が、浮き上がるように取り除かれてゆく。

「外れたっつ!」

バチンツと、勢いをつけて弾かれたような派手な音が響くと同時、触手スーツがズタズタに引き裂かれ、千切れ飛んでいくのが見えた。

（身体がっ——動くっ、すっごく軽くっつ!）

阻害されていた魔力の流れが、淀みなく全身に通い、メイの表情が見るからに暗々と輝く。それと対照的なのは、暗く歪んだヤミヨの表情だ。

「そんなっ……よくもっ、蛇風情がっつ!」

「そういえば、そっちの犬っコロはいないみたいだけど、どうしたのかしら。飼犬の躰もできていないなんて、飼主失格ね!」

シユカの言葉にヤミヨは歯軋りし、この場にいらないリンドの不手際を呪う。だがリンドには役割がある——そのため、ここにはヤミヨと、魔力を餌に釣られた闇生物どもしかいない。闇生物も、不調のメイ相手なら目眩まし程度にはなるのだが——

「ソレイ・プリユート!」

魔力の限界値が目減りしたとはいえ、触手による忌まわしい淫縛から逃れた光魔少女相手には、壁の役目すら果たせなかった。杖の先端に浮かんだ光球から放たれる光線に撃ち抜かれ、闇生物はその魔力を失い、闇世界へと帰されてしまう。

「くっ……役に立たないやつらね……」

「もう許さないから、ヤミヨちゃん!」

「黙りなさい——私のペットを始末したところで、すでにあなたは私より格下なのよっ……」

対峙し、一瞬の呼吸を挟んだ直後——

「光よ——」

「闇よ——」

二人の膨大な魔力がそれぞれを中心に渦を巻いて集まり、生みだされる魔力の流れと波がぶつかり合つて、火花を散らす。

「はああああああ——つつつ!」

声を張り上げ、心を叱咤し、メイは相手の魔力に僅かたりとも競り負けまいと、魔力を注ぎ込む。彼女の言う通り、触手による妨害が断られたとはいえ、ここまでの魔法私用によって、自分の力が彼女未満になっているのは間違いない——それはすでに、身をもって体験している。

「ふん、いくら声を上げても無駄なもの——」

そうしてヤミヨが杖を僅かに振る、その波動だけで魔力の波が勢いを増し、こちらの光の魔力に亀裂のような歪みが生じていた。

（つつ……まだっ……もつと、もつと力を——）

以前の襲撃においても、彼女は学校でなにかをしようとして企んでいるようだった。そして今回も、魔力で学校を覆うという行動を見せている。

目的自体はわからないが、それが闇の扉の開放に繋がる行為なのだと思えば、自分が阻止しなければならぬ。ヤミヨが自分にしたことを考えれば、彼女の意図は間違いなく悪辣で陰湿で、人の尊厳を地に貶めるようななにかに違いないのだから。

「私は——私がどうなつても、あなたを倒すよ!」

「だから無駄だと——つつ!」

学校を、みんなを、この世界を守る——その意思がメイの心に光を宿していた。

「馬鹿なっ……」

ヤミヨの表情が歪み、怒りを滲ませて噛み締める唇から血が滲む。だが、憤怒の形相で魔力波をぶつけても、メイの光の渦は乱れなかった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**